
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ Another epic. ~

Ignite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～Another
epic～

【Nコード】

N2188X

【作者名】

Ignite

【あらすじ】

この小説は『魔法少女リリカルなのはStrikers』のストーリー設定を元にした創作物です。時列は3期終盤、JS事件解決後から六課解散までの間の出来事を主体に自分のオリキャラ達を交えて描かれています。初投稿の為、駄文・誤字などがあつたりしますが極力本編の世界観に合わせるよう努力します。この手の創作物が苦手な方は閲覧は遠慮、バックオーライすることをお勧めします。

なるべく感想書いてたりしてくれると、モチベーション上がるかも
…。

プロローグ

JS（ジェイル・スカリエッティ）事件終結から1カ月弱。隊舎の復旧作業も完了して通常の業務を開始した部隊長“八神はやて”率いる『古代遺物管理部 機動六課（きどうろつか）』のメンバー達は、隊長陣・フォワードメンバー・ロングアーチスタッフ、誰一人欠けることもなく新たな再スタートを切る。

だがしかし、そこに「世界」が存在する限り物語に決して終わりはしない。

——機動六課のエース達は、今新たな始まりの空へ飛び立つのである……。

Epic・1 『Re:Start.』

ジェイル・スカリエッティ事件解決から1ヶ月弱。この大規模な事件による被害は相当なものではあったが、今ではすっかり爪痕も殆ど消え始め、六課隊舎も修繕工事が完了して通常勤務が可能となった。平穩を取り戻したミッドチルダで、なのは達は新たな再出発を切ったのだ。

新暦75年11月上旬・ミッドチルダ中央区画

時刻は午前11時過ぎ、場所はミッド中央部の管理局施設の出入り口前。そこには六課部隊を纏める若き部隊長『八神はやて』と、同隊所属の執務官『フェイト・テストロッサ・ハラウン』の姿があった。

「ハア、やっと終わったわ」

「フフッ、お疲れさま。」

少々疲れ気味なはやての手を添えてフェイトが優しく微笑む。

「うん、ありがとうなフェイトちゃん。せやけどホンマ疲れた、歩く度に視線が次から次に視線向けられるんやもん…普段以上に気疲れしてもうたわ。」

「アハハ、まあまあ…」

はやての言葉に軽く苦笑を浮かべるフェイト。

「さっきなんか若手っぽい子達に“尊敬してます！”って告白されたんよ？まあ、嬉しい限りやけど…」

JS事件で機動六課の有能さは上層部にも大きく評価され、一部では“奇跡の部隊”と称賛を受けているほどである。そんな機動六課

の魔導師達に憧れ、尊敬の念を抱く若手も決して少なくはない。はやても口では謙虚に徹しているが、内心嬉しくて堪らないのだろうとフェイトは感じていた。

「でもそれ、はやてだけじゃないよ？私だってそうだし…」

「アハハ、確かに！でも私らでアレやと、なのはちゃんとか今以上に凄いことになるやろね。」

「まあ、なのはは“管理局のエース”だから…」

2人揃って若干遠い目をして空を見上げる。

機動六課隊舎・陸戦用空間シミュレータ

場所は写って機動六課の訓練場。“エース・オブ・エース”でありスターズの隊長兼教導官『高町なのは』と、同じくスターズ副隊長兼戦技教官である鉄槌の騎士『ヴィータ』の下、スバル達フォワード4人は今日も今日とで激しい訓練をこなしていた。

MC：《Protection「プロテクション」》

目の前に右手を突き出してバリアを張るスバル。

MC：《Wing Road・「ウイングロード」》

「うおおおおおおおおッ——！！？」

素早く光の道を駆け、叫びを上げながら標的へと向かっていく。どうやらガジェットとの戦闘訓練を行っている模様だ。

『キャラ、地上から空に向かって8機飛んでったわ…後ろよ！』

「フリード、旋回して！」

地上では精密射撃でティアナが、空にはキャラとフリードが迎撃に当たっていた。

「ブーストッ！！」

STO：《Speerangriff・「スピーアングリフ」》
更に続いてエリオもストラーダでの加速を利用した刺突で複数のガ

ジェットを撃破した。

「やっぱもう性能上げただけのガジェットじゃ、もうアイツらの敵じゃねえな。」

「でも初期に比べたら、裁き方が上手になったでしょ？」

「というか、上手くなつて貰わなきゃ教え込んできたあたしらがこっちも困るっつーの…」

4人の戦闘ぶりを少し離れた場所から眺めるなのはとヴィータ。初期の頃と比較しても、フォワード達の成長は著しい。憎まれ口は叩きながらもどこか嬉しそうなヴィータを、なのはは感じ取りながらも逢えて口には出さなかった。

「オイ、なのは…」

「んっ、そうだね…はい、じゃあ集合！」

ヴィータの言葉に電子画面の隅に表示した時計を見れば、なのはは号令を掛けてフォワード陣を集合・整列させる。

「じゃあ午前の訓練はここまで、お疲れさま！」

「…」ありがとうございます！」「…」

「次の訓練は夕方から…書類仕事とか残ってるやついたら、さっさと片付けとけよな？」

ヴィータの言葉にティアナはチラリと相棒であるスバルに視線を向ける。

その視線に気付いたのか、スバルが軽く苦笑する。どうやらまだ残っているらしい。

「ハァ、お腹空いた…さあ、今日もいっぱい食べるぞー！」

練習後のストレッチを終え、なのはとヴィータ共々食堂へと向かう6人。

「ハイ！」

「アンタ達の場合1年中そうでしょうが…」

「アハハ、いっつもお皿山盛りですもんね。ちよつと羨ましいかも…」

談笑しながら隊舎入口前に差し掛かると、視線の先に見慣れた姿が

2つ見えた。

「あつ、みんな今日もお疲れ様やね？」

「はやて、おかえり！」

外回り中だったはやてとフェイトと鉢合わせした。

「その様子だと、今日もアレのせいでお疲れ？」

はやての表情を読み取ったかのように、なのはが口を開く。

「アハハ、まあな…部隊が有名になる言うんも、なかなか考えモンやね。」

「あたしもここ最近、他の部隊に戦技指導行く度に若手連中からギリギリした視線向けられんだけど…まったく、ちよつとは自粛して欲しいモンだ。」

やれやれと言った表情を浮かべながら、ヴィータが溜め息を漏らす。
「でも、あたしはその気持ち分かんなくもないかなあ…なんて！今や六課は若手魔導師の憧れの部隊、みたいな噂もあるみたいですし…。」

若干苦笑を向けながらスバルが頬を掻きつつ意見する。実際、隊長陣だけでも局内では相当名の知れたメンバーが揃っているのだ。憧れや尊敬を抱かない方が当然であろうと、エリオやキャラも内心同意した。

「そうかあ…」

スバルの言葉に両腕を組み、ふと考え込み始めるはやて。

「どうかしました？八神部隊長…」

「あつ、ううん！何でもないよ？ほらほら、フォワードメンバーは早ようシャワーして御飯食べに行かなお昼休み短くなってまうよー？」

片手を左右に振り、ティアナの質問を軽く流してフォワード4人を促すはやて。

「りよつ、了解！ほらみんな行こう！」

「あつ、ちよつと待ちなさいってば…では、失礼します！」

「いつ、行こうかキャラ？」

「うん！そうだね。」

それぞれ隊長陣に挨拶を向ければ先にその場を後にするフォワードメンバー。

「アハハ、ところで2人とも…」

「んっ？」

フォワード達が去った後、なのはが再度口を開いた。

「“例の件”の方はどうだった？何か情報は…」

「うん、上層部の報告だと…動き出してる可能性は大みたい。」

「今シグナムが現場に向かってるから、詳しい話は夜になると思うわ…」

神妙な面持ちで語り始める隊長陣4人。果たして“例の件”の内容とは…。

管理外世界・某所

同時刻。場所はミッドチルダとは別のとある『世界』。人気のない薄暗い暗闇の中、椅子に腰掛け誰かと通信をする人影があった。

「ご苦労様、悪いわね？1人でやらせちゃって…」

《大丈夫ですよ、これも仕事ですから…》

「そう、ありがと！じゃあ帰ってきたら詳しい報告よろしくね？」
そのまま飄々とした口調で通信を終える。そして、その人影は腰掛けたまま手元のボタンを押す。

「さーで、そろそろ次の段階に進まなくっちゃね…」

電源が起動したのか、室内には無数のモニターが表示される。

“次の段階”とは何を意味するのか、物語は今新たな幕を開き始める…。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

Epic・1 『Re:Start.』 (後書き)

T w i t t R o o m

ハシグナム

オイ、今回私の出番は無しなのか？一応隊長陣ではそれなりに出番も多いというのに…。

ハ作者

尺の問題です、というかこっちの文章力舐めないで下さい。物語の構成は出来上がってるとはいえ、文字にすんのは大変なんです！あんま長文だと頭働かなくなるし…。

ハシグナム

まあ良い…とにかく、続きが気になった者は期待せずに次回を待て。

ハ作者

それまだ言うタイミング早いですって！？

とりあえず、1話はのほほんとした感じにしました。

次回からは徐々に進んでいきますので…。

Epic・2 『兆(きざし)』

ミッドチルダ西部・森林地帯

午後2時を過ぎたミッド西部の森林地帯。その上空を1機のヘリが、どこかへ向けて飛行していた。

「もうすぐ着きますよ、シグナム姉さん！」

「そうか、わかった…」

操縦者は機動六課・ロングアーチスタッフであるヘリパイロット『ヴァイス・グランセニック』。後ろの座席には『剣の騎士』の異名を持つライトニング副隊長『シグナム』が腰掛けていた。

(…まさか、こんなに早く此处で何かが起きるとはな…)

窓から地上の景色を見下ろしながら心の中で1人呟くシグナム。そして、視線の先に見える目的地と思わしき『山』を見据えた。

「お疲れ様です、シグナム二等空尉！」

「ああ、ご苦労…」

「それではこちらに…」

現場に到着したシグナムを先に現場にやって来ていた局員が迎える。そして、案内された先は…

「酷い有様だな、これは…」

そこは、あの『ジェイル・スカリエッティ』がアジトとして潜んでいた洞窟であった。現在は管理局の下で今も尚調査が続けられており、現場周辺は管理局員が多数調査に来ていた。はやて達が隊舎前で言っていた“例の件”とは、此処の調査も含まれているようだ。

しかし現在はアジトとしての機能はしておらず、室内にあった研究機材などは全て瓦礫の下敷きとなったため今ではただの崩落現場と

化している。現在は通れるルートも管理局の手により数箇所修繕されているらしく、シグナムはその道すがら内部の様子を見て小さく言葉を漏らすのだった。一体此处で何があったのだらうか…。

「それで、連絡にあった“例の物”は…」

「今は我々の調査部隊が嚴重に見張っています、誤作動でもして何かあつては事ですから…あつ、あれです！」

局員が指差した先に視線を向けるシグナム。そこには、縦型の泥塗れな“装置”らしき器物があつた。

「これは…」

「調べたところ、ガジェットドローンの管理などを行っていた装置のようです。機材の殆どは破損して使い物にならずデータも完全に消えていたのですが、奇跡的にこれだけはデータの消失を免れたらしく…」

外装部は凹みが出来たりと破損しているも、データが保管されているであろう中枢部は無事だったが多少画面が乱れつつも機材の電源は機動していた。データ内部の解析を続けている局員を眺めながらシグナムは説明を受ける。

「それと、先程分かったことなんですが…」

「何だ？」

神妙な面持ちで局員が機材の方へとシグナムを誘う。

「…どうやら、何者かがサーバーに侵入して内部のデータをコピーしていったようなのです。一応痕跡を探ってみましたですが、巧妙にデータ改竄が施されているようで…」

「足取りが掴めなかったという訳、だな…。」

小さく局員が首を縦に振る。

「イヤ、それが分かっただけでも充分だ。それで、コピーされたデータの内容は…？」

「現在解析中です、こっちはそんなに時間は掛からないかと…」

「そうか、引き続き此处は頼んだ…」

ひとまず他の場所も見て回ろうとシグナムはその場を後にした。

（JS事件以降、この現場には管理局の人間以外は近付けない。だから他の場所からデータのハッキングを、イヤ…仮にそうだとすると、あの機材が見つかったという情報はここにいる管理局員しか知らないハズ。となると…）

1人静かに考え込むシグナム。その脳裏に過ぎる物は何か、分かっているのは…決して自分達にとって有益ではないことだけである。

機動六課隊舎・会議室

「そうですね、報告ご苦労様です。シグナムさん…」

夕日も沈み切った夜。六課の会議室にはなのはを始め、フェイト・はやて・ヴィータの隊長メンバーがシグナムからの通信を受けていた。

「んで？ハッキングされたデータってのは、ヤバそうな内容のやつとかか？」

《今現在分かっているのは、ガジェットの基礎データや生体実験に関する物で…聖王のゆりかごのようなロストログアに指定されるような兵器の製造法などは一切発見されなかったようだ…》

「…でも、それだけでも分かったことは一つ。確実に誰かがスカリエッティの後を継ぐ形で何か仕出かす気なんは確かだね…。」

データのコピー、足取りを探らせない為の改竄。現段階では確信出来ずとも、再び管理局に対する攻撃がいつか起きるのは間違いない。フェイトの言葉に、なのは達は揃って表情を強張らせた。

「とにかく、後はデータ解析が全部終わらないと何も進展しないし…今日はこの辺でお開きにしようか？」

「そやね。シグナムもご苦労さん、帰ってきたら遅めの御飯にしようか？」

《ハイ、あと10分ほどで隊舎に帰れますので…では、失礼します。

「うん！ほなまた後でな？」

シグナムとの通信を終えて会議室を出る4人。フェイトとヴィータは一旦部屋に、なのはは残った仕事を片付けるべくオフィスへ、はやてはシグナムが帰ってくるまで部隊長室で待とうとと各々歩き始めた。

「それにしても、こんなに早くことが何か起きるとはね。」

「まあ、ある程度予測は出来たことやけどな…事件からだいぶ経ったとはいえ、本局が受けたダメージはデカかったし…その隙付いて仕掛けてくる連中がおらんハズもないからね…」

はやての言葉になのはも静かに同意する。全快同然とはいえ未だJS事件で受けた傷跡は残っている部分もある、特に地上本部が良い例だ。この機に反乱分子が活動を始めるのは目に見えていた。

「でも、何か起きたとしても…あたし達が全力で止めるけどね？まあ、まだ捜査令状降りてはないけど…」

「アハハ！その時は頼りにしとるよー？」

互いに笑顔を浮かべ合うなのはとはやて、その時だった…。

「あつ、はやてちゃん！」

後方から幼い少女の声が響く。声の主はリインフォース？だった。

「ああ、リイン！どないしたん？」

「はやてちゃんに頼まれてた件、終わっただんで報告に来たのと…お腹空いちゃったんで食堂に行こうかなって思っただんです！」

「そうかー、おおきにな？じゃあ一緒に食堂行こか？もうすぐシグナムも帰ってくるし…」

「ハイです！」

リインを肩に寄せ、再び歩み始めるはやて。

「頼まれてた件って？」

「ああ、実はな…」

すると耳に手を当てヒソヒソとなのはに内容を説明し始める。

「えっ、そうなの？というか、わざわざ内緒話にする必要あった？

今…」

「まあまあ、細かいツツコミはなしや！」

苦笑を浮かべるのはを笑顔を浮かべて嗜めるはやて。

「でも良いね、それ！良い刺激になるかも…」

「昼間のスバルの発言聞いているの思い付きやけどね？詳しい話は纏めて、ヴィータとフェイトちゃんにも話すな？」

「うん、りょーかい！」

揃って笑顔を浮かべる2人。果たしてその内容とは…

隊員宿舎・スバルとティアナの部屋

その頃、訓練を終えたフォワードメンバー。エリオとキャラもスバル達の部屋に集まっていて、神妙な面持ちを浮かべていた。

「やった、上がりです！」

「ええー！？またあたしがドベなのー？」

悔しそうな顔を浮かべて手元に残ったカードを見るスバル。どうやらランプでババ抜きをしていたようだ。

「アンタ全部顔に出ちゃうから負けんのよ、ポーカーフェイスくらい覚えなさいって…」

「けどティアナさん凄いですね、4回ともトップで上がりなんですから…」

膝の上のフリードを撫でながらティアナを称賛するキャラ。

「ううー、ティアの場合読めなさ過ぎるんだもん！もっと素直になつてよお…」

「それ、どういう意味かしら？」

スバルの発言にギロリと睨みを利かせるティアナ。その様子によりオとキャラは苦笑するしかなかった。

「あつ、もうこんな時間！ほらほら、そろそろ寝ないと明日に響く

「よー？」

「逃げたわね、ったく…」

サラッと話を切り替える相棒の様子に溜め息を漏らす。

「じゃあ、僕達もこれで…」

「おやすみなさい、また明日も宜しくお願いします。」

「うん、おやすみ〜！」

廊下に出たエリオ達は、自分達へ部屋に戻り始める。

「んー、ッ…！さて、早く歯磨いて寝なきゃね。」

「明日はわたし達が練習場セットだしね…エリオ君、明日も頑張ろうね？」

部屋へ戻る道すがら、キャロがエリオに不意に口を開けば優しく笑みを向ける。

「うつ、うん！もちろん…急にどうしたの？」

「何でもない、何となく言いたくなっただけ…ほら早く！」

「あつ、待つてっば！」

軽く駆け足になったキャロをエリオが追う。

「じゃあ、電気消すわよー？」

「うん、良いよー！」

そして同じ頃、スバルとティアナも自室で各々のベッドに横たわっていた。

「ねえ、ティア…この先ずーっと今みたいに平穩に毎日過ごして、なのはさんの特訓受けられてたら良いよね…」

「何よ、急にそんなこと言い出して…」

「だって…来年にはあたし達、ここ卒業しちゃうんだよ？あたしもティアも進路希望出してるけど、離れ離れになるかもしれないし…出来るだけ長くこうしてたいじゃん。」

「……………」

機動六課は試験的に設立・運用が開始された部隊。その活動期間は僅か1年、その間にまた先のような事件が起きれば訓練どころではない。長いようで短い期間、みっちり鍛えてもらいたいというスバ

ルの気持ちもよく理解できる。それは無論自分も同じだとティアナは心の中で思っていた。

「バカね、長かるうが短かるうがいつかここを巣立つてくのはみんな同じでしょ…そんなこと考えてる暇あんならさっさと寝なさい、なのはさんの訓練ビシバシ受けたいなら尚更よ…」

ティアナの言葉に数秒黙り込めば、相手の言葉に自分の心情を察してくれたと思えば1人笑みを浮かべる。

「そうだよね、ごめん…じゃあ、おやすみ！」

「んっ…」

そして2人は、静かに眠り始めるのだった。

部隊長室

そして時間は更に過ぎ、時刻は夜の12時少し前。室内ではやてはどこかに連絡を取っていた。

「ハイ、それでは2日後に…よろしくお願いします！」

通信を終えれば席を立ち、窓から外の景色を眺めるはやて。

「…スバルとティアナの時みたいに、ええ子が見つかることを祈っとかんとな。」

「ですー！」

1人楽しそうな表情を浮かべるはやて。その様子にリインも自然と笑みを溢した。内容からしてリインが頼まれた件のことであろう。

果たしてその内容とは、物語は次のページを開く兆しを見せ始めたのだった…。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

Epic・2 『兆(きざし)』(後書き)

T w i t t r o o m

ハシグナム

前半、私単体で出番が多かったな…フツ、上出来だ。

ハ作者

そいつア良かった。ふう、意外と早めに第2話を更新出来たな…脳味噌回転率徐々に増してきたんだろうか。普段からこのくらい長文維持出来ればな。

ハヴィヴィオ

ねーねー、わたしの出番まだ？

ハ作者

次の話数からはちょいちょい出るから安心して、というか基本サブも含めてジャンジャン出すから。フラグ建築士のヘリパイさんだつて最初に台詞あげたし。

ハヴァイス

オイオイ、随分な言い方だなそれ。まあ、俺はシグナム姉さー——
——(強制終了)

ハ作者

そんな訳で第2話でした。来週から局側のオリキャラ登場です、とは言ってもスバル達より多少劣ってますがね。オリキャラばっか目立たせるの、ぶっちゃけ好きじゃないので配慮は努力しまーす。

Epic・3 『出会い』

機動六課隊舎・陸戦用空間シミュレータ

陽も昇り始めた早朝の機動六課。朝の訓練を終えたのか、なのはとヴィータ、フェイトの前にはスバル達4人が整列していた。

「じゃあ、今日の早朝訓練はこれで終了…お疲れさま。」

「……ありがとうございます!」

揃って声を上げるフォワードメンバー。

「それと連絡事項だけど、今日と明日はシグナム隊長以外は外回りで夕方まで戻れないから…昼の訓練はお休みね?」

「えっ、3人ともですか?」

「まあ…」

隊長が外回りに出ることは大して珍しくもないが、思わずエリオが反射的に口を開く。

《何だか珍しいですね。》

《まあ、なのはさんとヴィータ副隊長は他の部隊に教導行ったりしてるし…別に不思議がることでもないわよ。》

不思議がるキャラに対して特に気にすることなく念話を返すティアナ。

「だからお昼は仕事が終わったら街まで遊びに行っても大丈夫だから…それと、近々みんなには伝えることがあるから…楽しみにしておいてね?」

「えっ?」

唐突なフェイトの言葉に4人揃って不思議そうな顔をする。一体何を楽しみにしておけというのだろう、疑問が沸き立つフォワード陣

であつた。

《どういう意味かな？今の…》

《あたしが知る訳ないでしょ…》

念話で送られるスバルの質問を即答であしらうティアナ。

「じゃあ、解散！」

食堂

シャワーを浴びに行つたスバル達と別れ、なのは達は先に食堂へと足を運んでいた。八神家の面々とも偶然鉢合わせ、一緒に傍で食事をしているようだ。

「ううー…」

そのなのはとフェイトの間で、一緒に朝食を食べに来たヴィヴィオが皿の上のピーマンを睨んで唸っていた。

「ほら、あとちよつとだよ？」

「うん、ッ…！」

スプーンで残りのピーマンを掬い、意を決して口へと運ぶ。

「偉いねヴィヴィオ、全部食べれて…」

「でもやっぱり苦いのキラーイ…」

口内に巡る苦味を抑えんと水を一気に飲みするヴィヴィオであつた。

「アハハ、そうそう…みんな今日は頼むな？ヴィータも、思い付きに付き合わせる形になつても申し訳ないけど…」

「んっ？平気だって、それにあたしとなのはは立場上…見定めるのは慣れてるしな。」

フォークを口に近付けたままヴィータが答える。

「そうそう、それに良い提案だったと思うよ？“他の部隊の若手から、何人が短期で選んで六課の訓練に参加させる”っていう提案…。」

「あつ、やつぱそう思う?」

「私も良いと思うよ? 実質スバル達に六課で後輩が出来る訳だし…
今まで自分達が教わってきたこと誰かに伝えたり、逆に選考した子
達から学ぶこともあるかもしれないし…」

なのはとフェイトの言葉に更に嬉しそうな表情を向けるはやて。

「おおきになー、2人とも…けど一番の功労者はリインやな。昨日
はごめんなー? 急な仕事頼んで…」

「他の部隊の上官の方々に連絡取るくらい雑作もないですよー、そ
れにリインは補佐なんですから当然の仕事です!」
テーブルの上で胸を張るリイン。

「私も今日は用事で前に世話なつた部隊まで出向くから、そこで良
さそうな子見つけたらチェックしとくし…他の部隊の方は頼むな?」

「うん、任せて!」

胸の前で握り拳を作つて返答するのは。それに釣られ、フェイト
も小さく首を縦に振る。

「テストロッサ、お前は執務官としての業務があるから選考には参
加出来ないだろ…」

「うっ、シグナム…それは言わないで下さい。」

横槍めいた指摘に苦笑を浮かべるフェイト。

「釣られて首振っちゃまったんだな…」

「まあ、フェイトちゃんらしいわね。」

その横でヴィータとシャルが茶々を入れてくる。

「アハハ! コラコラ2人とも、それ以上虐めたつたらアカンよー?」

不貞腐れるフェイトを余所に、なのは達は思わず笑みを溢してしま
うのだった。

その頃、ミッドチルダとは別の世界では謎の人物が同じく薄暗い室内で腰掛けていた。

「どうも、ただいま戻りました。」

「あら、おかえり…」

すると室内に誰が入ってきた。高身長な体格からして、男性のようだ。

「それで、データの方はバッチリかしらー？」

「ノープロBLEM、この中にキッチリ…」

すると男は懐から取り出したUSBメモリらしき物体を手渡す。そして、その人物がメモリを挿入口に差し込めな画面が起動する。

「わおっ、バッチリじゃない！ありがとう。」

「いえいえ、^{ボス}団長の依頼…女性の頼みとあらばいくらでも尽力しますよ。」

画面に表示されていたのは、ハッキングを受けてコピーされた“ガジェットドローン”のデータ類であった。

「じゃあ、次の指示あるまで休んでて良いわよ。“充填”にも時間掛かりそうだしねえ。」

「ええ、そうさせてもらいます…」

男性は室内を後にし、^{ボス}団長と呼ばれる団長は別の部屋へと足を運ぶ。

「おはよう、起きてるかしらー？」

団長は歩を進めると薄めの黄色い液体で満タンになっている“生態ポッド”らしき機材の前に立ち、その内部で眠る“女性”に声を掛ける。

《おはようございます、団長…。》

「例のデータ手に入ったから、またそこから出て動けそうよー？」

《ありがとうございます。》

感情の籠らない淡々とした口調で女性が礼を述べる。その様子を見て、不適に笑みを向け返す。

「そこから出たら、ビシッバシッ！働いてもらうからね…何たってあたしの補佐なんだしねえ、貴方は…」

《無論です。私の命は貴方がいてこそ成立するようなものなのでから…》

「そつ、ありがと！そんじゃねー？」

飄々とした口調で部屋を後にすれば、急に1人廊下の壁にもたれ掛かる。

「……ツフフ、……ッ、ハハ……アハハッ、ハハハハハハッ——
——！！？」

手で顔の半分を覆い、まるで箍が外れたように狂喜染みた高笑いを上げる団長。

「ああ、最ッ高ねエ！？想像したら笑いが止まんないっとないわ、ツハハ……ッ……さーて、次の準備が出来たら…どう動いて見せようかしらア……！」

その瞳には、強烈な悪意が潜んでいた。果たして彼女達の目的とは、その正体は…。

機動六課隊舎・オフィス前

時刻は午後11時を過ぎた頃、スバルとティアナは書類仕事を終わらせてオフィス外の廊下に立っていた。

「ふうー、終わった終わった！」

「今日は随分早く終わったわね…」

隣で伸びをするスバルに皮肉めいた口調で言い放つティアナ。

「とは言っても、今日はそんなに量なかったじゃん。」

「まあね…」

「あつ、2人ともー！」

すると廊下の向こうからロングアーチスタッフのアルトとシャリオことシャーリー、その隣にはエリオとキャロも一緒にいた。

「今仕事終わり？だったらみんなに休憩スペース行かない？」

「うん、行く行く！」

そのまま6人は廊下を歩き、休憩スペースへと向かい始める。

「そういえばフォワード陣はもう知ってる？」

「えっ？何をですか？」

シャーリーの切り出した話題にキヤロが視線を向ける。

「うん、まだ決定事項じゃないんだけど…もしかしたらフォワードメンバーに新しい仲間が増えるかもって話！」

「へっ？」

その内容に思わずスバルとティアナがポカンとした顔を浮かべて間の抜けた声を上げる。

「ウソッ、それ本当ですか！？」

「フエイトさんから聞いたんだけど、今日は隊長達とその仲間にするメンバーを他の部隊に見定めに行くらしいんだって…」

スバルの驚いたような質問に、人差し指を立てながら語るシャーリー。

「へえ、選ばれるにしても…どんな人達だろうね！」

「ハイ、楽しみです！」

「……………」

スバルとエリオの嬉しそうな様子とは裏腹に、ティアナは静かに黙り込んだ。

「ティアさん？どうかしました？」

「あつ、ううん。何というか、この時期に人員の増強って…あたし的にはどうかと思ってね。フォワードは今まで4人でやってきた訳だし、確かに一時ギンガさんが出向したこともあったけど…全く知らない人間を前線メンバーに組み込んで大丈夫かな、って思って…」

「その言葉にも一理ある。これまで4人でチームワーク良くやってきた輪の中に見知らぬメンバーが加われば、今までと環境も変わる。急な編成で自分達の本領が出し切れないこともあるかもしれない。フォワードリーダーである分、戦術的な面なども配慮して意見を出

すティアナであつた。

「だいじょーぶ！それに最初から不安がつてたつて仕方ないよ、どんな人が来ようが…あたし達でフォローし合つていけば良いんだし！六課の先輩として…」

「…アンタ、簡単に言つてくれるけど…フォワードで誰が指揮取つたりしてるか分かつて言つてる？」

気楽に言ってくれる、と思いながらスバルに意見するティアナ。

「アツ、アハハ…」

「私は大丈夫と思うよ？それに、選考つて言つても…教導官として目利きも確かなのはさんにヴィータ副隊長、それに人を見る目には抜群に長けてる八神部隊長が選ぶんだし…期待して待つてようつて！」

返答に悩むスバルをアルトがフォローに入る。

「まあ、あたしだつて端から邪険にする気なんてないから大丈夫よ…」

「にしても、どんな人が来るんでしょうね。」

エリオの言葉に6人揃つて考え始める。

ミッドチルダ北部・陸士104部隊隊舎

場所は変わつてミッドチルダ北部。はやては、かつて所属していた陸士104部隊に来ていた。

「さーて、用事も終わつたし…早速訓練見せてもらおかなー。」

廊下を進み、隊舎外へと出れば訓練場のある方へと向かう。

「えーつと、こつちやつたよね…んっ？」

その途中、茂みの向こうから“シュツ！”という物音がする。ふと気になったのか、茂みを越えて音のする場所へと向かう。

「フンツ…ハッ！」

（音の主はあの子か、自主練習っぽいな。歳は、ティアナぐらいやるか…）

そこには黒いＴシャツにカーキ色の長ズボンを着用したシャドーボクシングに勤しむ少年を発見する。

（んっ？何だ、見掛けねえ人だな…客人か？）

はやての存在に気付いたのか、少年は拳を突き出すのを止める。

「あのー、どうかしました？」

「あつ、ごめんごめん！お邪魔やつたかな？」

邪魔をしたかと感じながら両手を胸の前で合わせるはやて。

「イヤ、もうすぐ訓練の時間なんで大丈夫ツスよ。んっ？あれ、ひよつとして貴方…」

「オーイ！アツシュー、いつまでやってんのさー！」

すると、はやてとは別方向の茂みから別の少年が同じ訓練着姿で現れる。

「もうすぐ訓練始めるんだから、って…あれ？そっちの人は？ひよつとしてナンパ——」

次の瞬間、少年の言葉は遮られた。“アツシュ”と呼ばれる少年が左手で繰り出したアイアンクローにて…。

「あだだだっ！？」

「お前と一緒にされんのは困るなー、クレオ君よお…」

ギリギリと力を強めて“クレオ”と呼ばれる少年の頭を怒り気味に掴むアツシュ。

（アハハッ、何やおもろそうな子らやな〜）

「…失礼しました。えーっと、改めて恐縮ですが…機動六課の八神二等陸左ですよね？」

「んっ？うん、そうやで。そういう君らは？」

「ハイ、陸士１０４部隊所属…アツシュ・スタリオン三等陸士であります！」

ピシッと敬礼を向けながら名乗るアツシュ。

「…オイ、お前も挨拶しろっつのだ…。」

隣で頭を押さえながら屈むクレオを足でチョンと2回蹴る。

「誰のせいだよ誰の、ツ…初めまして！クレオ・ハイゼット三等陸士です。」

「八神はやて二等陸佐です。こちらこそよろしゅうな〜？」

2人の挨拶に対し自分も敬礼を向けて名乗るはやて。

「ところで、八神二佐は104に何を…」

「ああ、部隊の人とちよつとな。昔ここに所属しとったから、私…」

「へえ〜、そうだったんですか！にしても機動六課ってあそこですよね？最近局内で話題になってる！」

興味津々といった様子でクレオが口を開く。

「アハハ、そんなに有名なん？」

「そりやもう！何か上官も美人揃いで和気藹々としてて、一部じゃ配属されたい部隊No.1とまで噂に——」

「どこ情報だよそれ！？というか着目するところ違えだろがツ！？」説明の途中にアッシュの素早いツツコミ（？）が炸裂する。

「そうかそうか〜、じゃあそんな部隊に出向とかなったらウツハウハやるねえ〜」

「なったら良いですよ〜！」

はやての言葉に二カつと楽しいな笑みを見せるクレオ。

「八神二佐、その…あんま刺激しないで下さい。このバカ調子乗ると手間かかるんで…」

「それ、どういう意味？」

「そのまんまの意味だアホ…ってヤベ、急がねえと訓練遅れんぞ！」ふと時計を見れば訓練開始時刻が徐々に迫りつつあった。

「うわ、ホントだ…ってアッシュがいつまでも日課のイメトレやってるからだろー！？」

「あー、良かったら訓練見せてもらってもええかな？」

少し慌て気味な2人に優しく言葉を掛けるはやて。

「えっ？ああ、多分大丈夫とは思いますが…」

「そうか、ほな2人は早いところ行った方がええな〜。ほら、駆け足

駆け足！」

「りよっ、了解！」

二人揃って去り際に敬礼を向け、アッシュとクレオは訓練場へ駆け出していった。

「さて、あの子らはどのくらいの力持つとるか…見物やね。」

2人のやり取りを思い出しながら、はやては遅れて訓練場へと再び向かい出す。

その道中、はやての瞳はスバルとティアナを初めて見た時のような“期待”に満ち溢れていた。

T o b e c o n t i n u e . . .

Epic・3 『出会い』（後書き）

T w i t t r o o m

ハはやて

イヤ、今回は私が終盤出番1人占めしとったな。3期じゃ後手に回ってて2期に比べて出番なかったし、嬉しいわ。

ハクレオ

ちよつとちよつとー、オレとついでにアッシュもいますからね。大事な大事な初対面ですからねー!?

ハアッシュ

俺ついでかよ、ぶん殴るぞこのボケ…。

ハ作者

ハイハイ喧嘩は表で頼みます。そんな訳でまたまた長文になった第3話でした。敵勢力も徐々に蠢動し始めてますが、出番はまだちよつと先かと…次話からは上記オリキャラ2人を絡めたストーリーが展開されるので、キャラ設定は次に記載しますね?ではでは…。

Epic・4 『Selection』

機動六課に短期ながら新たな若手を参入させようというはやての提案から3日。

教導官であるのは、ヴィータ、部隊長はやての隊長3人は数日間回って目に止まった若き魔導師達の訓練風景のデータなどを所属部隊より提供してもらい、それを見て誰を外向させるか会議室で話し合っていた。

機動六課隊舎・会議室

「…ふう、ひとまず…人数はある程度絞れたね。」

「ああ、あとはこっからまた何人か選ぶ訳やけど…2人はどう？お薦めな子っておる？」

デールに頬杖を付きながらはやてが2人に問う。

「技術的な面で選ぶとするなら、コイツかな。他の訓練生と違って基礎は出来上がってるし、ただ性格的な問題はあるそうだったな…」
表示した資料を見ながら答えるも、推薦するにも若干迷いがあると
言いたげな顔をするヴィータ。

「わたしはまだ答えは控えようかな。やっぱり生で見るまでは結論
付けないし…」

「まあ、それは確かになあ…」

実際映像だけでは判断材料としては不足している、教導官としては
実際この目で見てみない限りは答えられない。なのは意見に納得
するはやて。

「それで、はやてちゃんの方はどうなの？推したいって思う子は…」

「そやねー、私の推薦はこの2人やるか…」

はやてが電子画面に映し出した資料には、先日出会った2人の少年が写っていた。

「んっ？確か104で最初に見掛けた連中だったよな、この2人…」

「そうそう！技術的な面は置いといて、なかなか面白い子らやったんよ。何かスバルとテイアナみたいな感じで…」

人差し指を“ピッ！”立てて振り返りながら楽しげに語るはやて。

「そういえば、使う魔法も互いの役割も2人と近かったね。」

「まあ、依怙^{えこひいき}贖するつもりはないけど…出来たらこの2人は最後まで残って欲しいわー。」

「そっか、じゃあ…ひとまずこの“15人”で決まりだね。」

「そやねー！」

選考の第一段階を終え、なのは達は会議室から出る準備を始める。

「ほんなら、あとで選んだ子らの部隊長さん達に連絡しとくなー？」

「うん、お願いね？はやてちゃん。」

「…あつ、はやて！104なら今日あたし戦技指導で顔出すから、そっちは任せてくれて良いよ。」

「そっかー？じゃあ、そっちはお願いするな？」

それぞれ業務へと戻る隊長陣。果たして、第一選考に残った15人の中から何人が選ばれるのだろうか…。

ミッドチルダ上空・JF704式ヘリコプター内

その頃、フェイトはエリオ・キャロの2人を連れてヘリに搭乗。執務官として本業である広域捜査に出向いていた。

「あの、フェイトさん。」

「んっ？どうしたのエリオ？」

エリオの方を向き、フェイトが小首を傾げる。

「この間シャーリーさんから…今、八神部隊長の提案でフォワードに他の部隊の魔導師さんを短期で配属させるって噂聞いたんですけど…」

「えっ!？」

少々驚き気味にフェイトが軽く訊ねる。その様子にエリオとキャロは不思議そうな表情を向ける。

「シャーリーってば、明日発表するから内緒にしておいてって言ったのに…」

「じゃあ、本当なんですか？」

額を押さえるフェイトにキャロが再度質問する。

「うん、なのは達が気になった子を何人かに絞って…はやての話じや、選抜した子達を呼んで六課で採用テストを受けさせるらしいよ?」

「へえー、そうなんですか。」

「詳しいことは全部決まってから話すつもりだったんだけど…ハア、驚かせたかったのに…」

フェイトの姿を見て苦笑を浮かべるエリオとキャロ。

「いえ、充分驚きましたよ? ねえ、キャロ…!」

「うっ、うん! 今でもソワソワしちゃってるくらい…でも、こんな時期に珍しいですよね。」

「…まあ、確かにね。でもこの提案ってエリオ達の為でもあるんだよ?」

その言葉に小首を傾げつつ、どういう意味かと思う2人。

「なのは達も言ってたけどね、最近みんな随分と力は付けてきた。

そろそろ訓練にも何か新しい趣向を加えなきゃって考えてた時にはやての提案が出たんだ…」

「要するに、僕達が学んできたことをその選ばれた人達に伝えたり…」

「逆に教わったりして、私達の応用力とか戦闘でのバリエーションを上げよう…ってことですか?」

「うん、そんなところ…私も楽しみだけど、なのはもつと楽しみにしてそうな感じだったな。教官だから当然といえば当然だけど…」

説明をする前に理解している2人の発言に微笑を向けながら首を縦に振り、ふと窓の外を眺めるフェイト。教官であるなのはとしても、どんな個性を持った逸材が選ばれて自分の指導を教え込みたいという気持ちは親友である自分には充分理解出来る。早く選考が終わらないか、フェイト自身も楽しみでしようがない様子だった。

ミッドチルダ北部・陸士104部隊隊舎

「よし、今回はここまで…解散！」

同時刻、104部隊にてヴィータは若手達に戦技指導をし終えていたところであった。余程厳しい内容だったのか、地面にへたれ込んで息を乱す者が大半だった。そしてヴィータは、ふとその中の2人へ視線を送る。

「ハア、ツ…ああー、疲れた疲れた。流石に六課の副隊長さんの訓練ともなると堪えないよなあ…。」

「…そりやそうだろうよ。つか、その割にはお前あんまし疲れてねえよな…いつの間にスタミナ付けやがったんだよ、オイ…。」

（あいつらだな…）

そこには、はやての推していた『クレオ・ハイゼット』『アッシュ・スタリオン』の姿があった。

「オイ、その2人！ちよつと来い。」

「えっ？あつ、ハイ！」

急に自分達を呼ばれ、駆け足気味にヴィータに近付く。

「お前ら、着替え終わったら応接室まで顔出せ…良いな？」

「応接室？ここじゃ話し難い内容、とかですか？」

「そんなんじゃないやねえけど、来れば分かんذار。良いからさっさと着替えて来い…」

クレオの質問をサラッと流して、1人先に隊舎へ向かうヴィータ。

「よお、お前ら何かしたのかー？」

「イヤ別に、何もしてねえ…ハズだけど…」

同僚の茶々に不貞腐れながら返答するも、一体何かと思いつつその背中を見つめるアッシュだった。

陸士104部隊隊舎・応接室

その後、応接室に出向いたアッシュとクレオはヴィータから六課への出向や選考テストの詳細を耳にする。

「……—という訳だ、詳しい連絡は2・3日中にこつちから伝える手筈だから…コンディションはバッチリ整えとくんだぞ？」

「りよっ、了解しました…！」

知らぬ間に第一選考を通過していた事実、唐突な選考テスト参加の報告。その突拍子もない話にアッシュは内心夢でも見ているのかと心の中で思っただった。

「イヤー、でもまさかこないだ八神二佐が来てた理由が若手選びだったなんて…くうー！？アッシュ、晩飯食べたら特訓開始だからね…！」

「お前、何か凄っげえ不純な動機でやる気出してないか？」

「気が合うな、あたしもそんな気がした…」

アッシュの横槍に乗っかるようにヴィータが即答する。

「ヴィータ教官も！？ってか別に不純と思われるても良いですよ、どうせ毎度のことだし…」

（…何か今まで見てきた新米の中で、一番扱い難そうなヤツだな。このクレオっての…まあ、訓練見る限りじゃそれなりに力はあった

みてえだし…あとはこいつら次第だな。」

拗ねた態度でそつばを向けるクレオを見て、とてもはやてが推薦するような人材とは思えないと感じるヴィータ。

「じゃあ、確かに伝えたからな。ああ、それとだ…」

「えっ、何ですか？」

室内から出て行くこうとして、途中で立ち止まったヴィータにアッシュが視線を向ける。

「うちのテストは相当厳しいからな、本気で六課であたしらの訓練受けたきゃ…それなりの覚悟はしとくだぞ？」

「…わかってます。やるからには真正面からぶつかって行くつもりなんで…その時は、よろしくお願いします！」

左拳をグッと握り締めた後、ピシッとした態度で頭を深々と下げるアッシュ。

「そうか、せいぜい期待しねえで待っててやるよ。」

憎まれ口を叩きながらも口角を上げて微笑を向け、応接室を後にするヴィータであった。

機動六課隊舎・オフィス

それから3日後、六課のオフィスではスバルとティアナが書類仕事に精を出していた。

「ハイ、おしまいっとな。」

「早っ！？相変わらずだけど…」

「アンタもさっさと終わらせなさい。ほら、半分やったげるから…」

「ありがとー、持つべきものは相棒だよねー！」

ティアナの助け舟に感謝の笑みを向け、再び画面に視線を向けるスバル。

「そっいえば、例の選考テスト…今週の週末にやるって聞いた？」

「聞いた聞いた。昨日なのはさんとヴィータ副隊長が話してるの聞いたけど、試験内容はあたし達が昇格試験の時受けたの近い内容らしいわよ…」

「ああ、なんか懐かしいね！」

記憶を遡りながらスバルは笑みを浮かべる。

「んっ？何の話かなー？」

「なのはさん！」

すると2人の傍になのはが後ろからやって来る。

「いえ、ちよつとした昔話です…」

「フフツ、そつか。」

手に抱えた資料をそつとテーブルの上に置き、微笑を浮かべるのは。

「なのはさん！例の選考テストって、やっぱりなのはさんが立ち会うんですか？」

「うん、ヴィータ副隊長と一緒にね…2人は選考テストの内容はもう聞いてる？」

「いえ、詳しくは聞いてないです。」

「右に同じで…」

ティアナが答えた後、片手を挙手させるスバル。

「第一選考で選ばれたのが全部で15人…今回は技術的な部分を審査するテストだから、時間制限はなしなんだ。主にターゲット破壊がメイン…だからちよつと数は多めにしてあるかな。」

その“ちよつと”とは、果たしてどの程度を基準に言っているのだろう。内心選考を受ける若手達に哀れむスバルとティアナであった。「あと八神部隊長も今回は立ち会うことになってるよ、自分で提案した事だし…顔を出さなきゃ面目がないだろうって、リイン曹長と一緒に…」

「へえ、ホント…どんな人達が来るか今からワクワクです！」

「実質、六課じゃ先輩になるんだもんね？スバル達は…」

六課が結成されて以降、エリオとキャロは歳は違えど同期になる。

後輩という存在がなかったため、スバル的には楽しみでしょうがないのだろうと感じるなのはだった。

「ねえ！楽しみだよ、ティアも！」

「んっ？そうね、アンタよりしつかりした人だったらあたしもずーっと助かるんだけどね。」

「ええー！それはないよー」

ティアナの皮肉にガクツと脱力するスバル。

「アハハ！当日はみんなも見学はしてオツケーだから、楽しみにしててね？」

「あつ、ハイ！」

「それと、早く終わらせないとお昼からの訓練に間に合わないよ？スバル……」

「あつ、ハイ……」

なのはの言葉に苦笑を浮かべて静かに画面との睨めっこを再開するスバルであった。

機動六課隊舎・フロント

4日程が経過して、いよいよ選考テストの当日を迎える。時刻は午前10時を過ぎた頃、選考会に選ばれた若い魔導師達が隊舎のフロントに集まっていた。

「ううー、緊張するわね……」

「大丈夫大丈夫、バシーツと1発合格決めてみんなに自慢しようぜ！」

「……ああ、ヤバイ……また腹が据れちゃいそう……」

「平常心平常心、緊張してるのは己のみにあらずだ……」

第一選考に選ばれた反面、いざテストとなると大半が緊張して落着かない者が多かった。そして、当然ながらクレオとアッシュの姿

もそこにあつた。

「――11、12、13、オレ達入れて15人か。第一選考で何人いたかは分かんないけど…結構いるね？」

「ああ、つか…お前ホント緊張感ゼロだな。まあ、緊張されても困るけどよ…」

「大丈夫大丈夫！へまはしないし、アツシュこそ…本番でお腹痛いとかは止してくれよー？」

「…、まったく…んっ？」

クレオの調子に自然と溜め息を漏らすアツシュ。すると、オフィス奥の廊下から足音が聞こえてきた。

「おっ、みんな集まっとるなー。」

「ハイ、じゃあ皆さん集合ですー！」

クレオ達の元にはやて、リイン、シグナムがやって来る。号令を耳にすれば若手達は2人の前に整列する。

「みんな今日は集まってくれておおきに、改めまして…機動六課部隊長の八神二等陸佐です。」

「ライトニング分隊副隊長、シグナム二等空尉だ…」

「部隊長補佐のリインフォース？（ツヴァイ）、リイン曹長と呼んでくださいです！」

3人の名乗りに全員揃って敬礼を向ける若手達。

《何か、えらくちゃんまい曹長だね？》

《良いから黙って聞いてろ、あとそれ絶対口に出すなよな…》

上官2名の前でもペースを崩さず念話で語りかけるクレオをサラッとあしらうアツシュ。

「連絡事項にもあったように、今日は選考テストはみんなの日頃の力を見る為のテストです！詳しい内容は訓練場で高町教導官より説明があるので、その時までには緊張は解しておいて下さいですー！」

「では、一旦更衣室で訓練着に着替えた後に隊舎前に集合だ。そこでテストを受ける順番を発表して訓練場に向かう。」

「じゃあ、まずは更衣室に案内するので…みんな私に付いて来て下

さーい！」

リインの声に後ろを着いていく若手達。

「いよいよですね、八神部隊長…」

「そやね、さあ…高町隊長達の方にも連絡しとかんとな。」

ついに開始される機動六課出向をかけた選考テスト。緊張する若手達は、このテストをどう攻略するのだろうか…。

T o b e c o n t i n u e . . .

Epic・4 『Selection』（後書き）

T W i t t R o o m

〔作者〕

フウ、数日振りの更新になっちゃったな。今回と次回は長めですがなるべく纏められるよう頑張ります。

〔フエイト〕

その影響かな、今回私出番というか台詞少なかったの…でも仕方ないよね。私ばかり喋っててもしょうがないし…。

〔シヤマル・ザフィーラ〕

……………。（何かを訴えるような目で此方を見ている）

〔作者〕

そんな目しなくなつて出番はありますから！？皆無とかにはしないから、という訳で第4話でした。皆さんの感想お待ちしております、ハイ…。

Epic・5 『選考会、開幕』

いよいよ開始される機動六課への出向を決める最終選考。局内でも郡を抜く優秀な部隊の隊長陣を前に、集まった若手達は緊張の色を隠せずにいた。

各々コンディションも万全にしているハズ、果たして一体どのような活躍を見せてくれるのだろうか…。

機動六課隊舎・陸戦用空間シミュレータ

その頃なのはとヴィータ、シャーリーの訓練場に先に赴き念入りにチェックを終わらせていた。

「シャーリー、調整の方はどうだ？」

「バッチリです！いつでも開始出来ますよ？」

拳を握り締めて返答するシャーリー。

「——…了解、じゃあ後で…。もうすぐ選考メンバー連れてくるみたいだから、最終チェックしとかないとね…」

ニコツと笑みを浮かべるなのは。その様子は、いつも以上に期待に溢れた様子に満ちていると感じるヴィータであった。

更衣室前

同時刻、着替え終わった若手達は更衣室から続々集まり出していた。そして、クレオとアッシュの2人も揃って隊舎前に向かっていった。

「さーて、やるぞやるぞー！」

「……………」

はしやぎ気味に歩くクレオの隣でアツシユは黙ったまま歩を進める。その道中、ずつと左肩に手を添えて腕を回していた。

「んっ？アツシユ、ひよつとして…痛むとか？」

「違いよ、念の為の動作確認だ。肩外れでもしたら大変だからよ…」
Tシャツの袖を軽く捲くるアツシユ。よく見るとその左腕は生身ではなく、強固そうな機械めいた“鋼の義腕”^{ぎわん}になっていた。

「そっ、だったら良いけど…」

「あつ！そこの2人ー！」

「「んっ？」」

すると後ろから聞き覚えのない少女の声がした。2人揃って振り返ると、スバルを含めたフォワードメンバー4人が揃って此方に近付いてきた。

（んっ、アイツら確か…）

「ああー！？ひよつとして、みんな六課のフォワードメンバー？こんな早くお目にかかれるとは思わなかったよ。あつ、オレはク——

ー

その瞬間、廊下に“ゴンツ！”という鈍い音が一瞬響く。

「痛つてえ、ツ——！！？」

義腕で拳骨を喰らったらしく、強烈な痛みに耐えながら1人しゃがみ込むクレオ。

「キーキー騒ぐなバカッ！？猿かお前は…」

「えっ、えーつと…」

そのやり取りにスバル達は呆気に取られる。

「コホン、悪い…続けてくれて良いぞ。」

一度咳き込みスバル達にアツシユが向き直る。

「じゃあ改めて、君達今日の選考会に参加する人達？」

「ああ、そういうアンタらは…六課の前線メンバー、ですか？」

相手の名前も階級もまだ聞いていないため、若干仰々しく聞き返す

アッシュ。

「うん、初めまして！あたしは機動六課スターズ分隊のスバル・ナカジマ…スバルって呼んでね？それからこっちが同じスターズ所属でフォワードリーダーの…」

「ティアナ・ランスター、堅苦しいからティアナで良いわ。階級とか関係なく…見たとこそんな歳変わらなそうだし…」

スターズの2人が名乗り終わるとエリオとキャロが揃って前に出る。
「初めまして、ライトニング分隊所属のエリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「同じく…キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。選考会頑張ってくださいね、えっと…」

「ああ、自己紹介しとかないとな。陸士104部隊所属、アッシュ・スタリオン三等陸士であります。それと、こっちのバカが…」

「バカバカ言うなよ、いきなり印象悪くなるだろ。えーっと、改めて…クレオ・ハイゼットです。」

拳骨を受けた箇所を擦りながら少し気落ち気味な声色で自己紹介するクレオ。

「あの…お2人ってひょっとして、コンビなんですか？」

先程のやり取りと会話を聞いていたように、エリオがふと訊ねる。

「んっ？そうそう、オレ達付き合い長いからさ。大体次に何するかって予測出来るし…こう見えても部隊の若手じゃ結構強いよ？まー、だから選ばれたのかもしれないな」

「次に何するか予測出来る分、こっちは気疲ればっかして参るけどな…」

（…何というか、どこにでもいるわよね。こういうお調子者タイプ…よくこんなのが第一選考受かったもんね…。）

クレオに容赦なく横槍を入れるアッシュ。その様子に内心、アッシュはともかくクレオが選ばれた理由が今一つ理解出来ないと思うティアナであった。

「そういえば、アッシュってその腕…」

ふと気付いたようにスバルがアツシユの手を指差す。

「んっ？ああ、これな…珍しいっちゃん珍しいもんな。昔事故にあつてな、そんな時に腕やつちまっただ…おっと、そろそろ集まつかねえとヤバイな。じゃあ、俺達もう行くな？」

ふと頭上に表記されていた電子時計の時刻を見れば、集合場所の隊舎前に向かおうとスバル達に別れを告げるアツシユ。

「あつ、うん！頑張つて！」

「オラ、行くぞバカ…」

「今日に限ってバカバカ言い過ぎなんだよ、イジメ！？あつ、受かつた時はよろしくー！」

先に歩み出して容赦ないアツシユの罵声に不満爆発させ、4人に振り向き別れを告げれば駆け足で去っていくクレオであった。

「何だか楽しそうな人達でしたね。」

「ツンツン頭の方はともかく、あのお調子者の方は心配ね。仮に出向決まったとしたら世話が大変そうかも…」

「んー？ひょっとして気になってるのティアー？」

次の瞬間、廊下に“ゴンツ！”という鈍い音が再び響く。

「痛ったー、ツ——！？」

「バカ言つてんじゃないわよ、チーム全体のこと考えて言つてんの！あたしは…ほら、さっさと見学行くわよ？」

「あつ、ハイ…」

ツンケンするティアナの後に続くエリオとキャロ。そして、頭を押さえながら後を追うスバル。その道中、エリオとキャロは内心2人揃ってクレオ達とスバル達に対して“似た者コンビ”だなと感じるのだった。

それから数十分して、隊長陣監視下の元で選考テストがスタート。内容は“制限時間無制限のフィールド内を移動するターゲットの破壊、及び指定したゴールへの到着”と至って簡単なもの。ターゲットの中には攻撃機能を搭載した物もいるが、然程難しい内容ではない。

「クソッ！思った以上に手古摺った、ハア…ハア…」

「だあああッ、もう！一体あと何体残ったのよ！？」

「…もう無理、魔力保たない…」

しかし、先にテストを受け終えた者達は精根尽きそうな表情を浮かべていた。実力を発揮して何とか全破壊は出来てはいるも、どのメンバーも疲労困憊状態だった。それを見学に来ていたスバル達も、自然と黙り込んでしまふのだった。

「うわ、みんな凄い疲れてますね。」

「うん、というか…あれ本当にテスト用なのか疑問に思えてきた。」

「あたし達が最初に六課で訓練受けた時に使った機体の2・3倍は早いし硬そうだし、タイムアタック形式じゃないとはいえ…あれ捌こうと思ったらしんどいでしょうね、相当…」

「一度に撃破しようと広範囲用の攻撃魔法使ってる人もいましたけど、容易くはいかないみたいですな。」

そして、若手達の動きを観察するなのは、ヴィータもテスト中は殆ど口を開かず様子を眺めていた。

「どうかな、ちよつとレベル高すぎたかな？テスト内容…」

15人中13人のテストが終了し、次のテスト準備が整わせる間になのはがヴィータに問う。

「これくらいやってちよつと良いくらいだろ。いくらスバル達と一緒にとはいえ、あいつらが出向メンバーに合わせてたんじゃ腕も鈍っちまうし…」

「まあ、そうだよな…」

ヴィータの答えに軽く苦笑するのは。

「ところでどう？ヴィータ副隊長の中で高評価な子はある？」

「うーん、3番目のやつと7番目のコンビは良かったな。あとの連中は、ちよつと根性が足りなさそうだ…劣勢になった途端尻込みしちまつてるやつもいたしな。」

「アハハ、手厳しいな。」

自分と違つて教え子には厳しい発言の多いヴィータの言葉に再度苦笑するなのは。

「さてと、次で最後だったね。シャーリー、準備の方は？」

「いつでもオーケーですよ！」

訓練場の調整とターゲットの準備を任されていたシャーリー。なのはの声に振り返り、軽く拳を握つてみせた。

《よし、リイン…こつちの準備万端だぞ。》

シャーリーの返答を聞いたヴィータは、念話でリインの連絡を入れ始めた。

《りょーかいですー！》

応答して元気良く返事をするリイン。その前には、テストを終えて疲れ切つていた若手達が地べたに座り込んでいた。

「…これでよし。ハイ、じゃあ次の人…！」

「他にどこか痛む子とかいたら、我慢せずシャマル先生に言い付けてねー？」

その少し後方ではフェイト、シャマル、ザフィーラの姿もあり、テスト中に出来た傷などを治癒魔法で癒していた。

《では、いよいよ最後の2人にテストを開始してもらいます！スタリオン三等陸士、ハイゼット三等陸士…スタート位置には付いてます？準備は良いですかー？》

電子画面を眼前に開けば指定したスタート位置でスタンバイしているクレオとアッシュに連絡を入れるリイン。

「ハイッ！」「」

一方は陽気に、もう一方は力強く互いに声を揃えて返事をする2人。その前にはスタートの立会人として、はやてとシグナムの姿があった。

「いよいよやけど…2人とも、無茶し過ぎんようにな?」

「へへっ、ビシッとサクッとやってきますよー!」

緊張の欠片もないクレオの様子を横目で見、アッシュは深く溜め息を漏らす。

「お前も大変だな…」

「いえ、もう慣れっこなんで…」

シグナムの哀れむ台詞に力なく失笑気味に返答するアッシュ。

「ほな、そろそろスタートしよか?」

「ハイ!頼むよー、グリッターエッジ?」

GE:《Yes master.「了解しました、マスター。」》
既にバリアジャケットを装着しているクレオの右手には、ボウガン型の愛機デバイス『グリッターエッジ』が握られていた。陽気な主の声に対し、グリッターエッジは短めな返答をするだけだった。

「…っしや、やるかソルダート!」

SOL:《Naturallich.「勿論です。」》

そしてアッシュは、両手足に籠手・具足として装着している『ソルダート』に言葉をかけ自分自身にも気合を入れる。

《じゃあ行くですよー?レディー………ゴオーツ!!》

ラインの合図にクレオとアッシュは前方へと駆け出し、スタートを切った。

場所は変わって、スバル達はなのは達の元へ合流して最後のテストを共に眺めていた。

「あつ、アッシュ達出てきたね!」

「あれ?知り合い?」

「ええ、さつき廊下で会ったんです。」

「そっか、ところでどうかな?あの2人…」

再度画面に視線を向け、選考テストの様子を見るなのは達。

GE:《Arrow Barrett.「アローバレット」》

「へへっ、順調順調ッ!!」

俊敏に動き回るターゲットを同じく俊敏に動きながらその頭上を飛び、矢の形をした魔力弾を高速連射して撃破するクレオ。

SOL:《Gluehen Schlaag・「グリューエン・シュラーク」》

「うつし!？」

対してアツシュは拳や蹴り、加えて肘打ちや膝蹴りを駆使する拳闘スタイルで次々ターゲットを粉碎する。その隙を付いてか、攻撃機能を搭載したターゲットがアツシュに迫る。

「おっと…」

その攻撃を右は跳んで回避すると同時に、ターゲットへ目掛けて無数の魔力弾がその装甲に突き刺さる。

「んじゃ、次行こうか!」

ターゲットを撃破し終えた2人は、確実にゴールを目指しつつターゲットを撃破し続けていった。

「オイ、あいつら結構凄くない？」

「最後のコンビネーション、あのツンツン君…後ろ見てなかったよ？ パートナーの人が攻撃するの分かってたのかな…」

その様子を電子画面で見る先の受講者達は、2人のコンビネーションを感心しながら見つめる。

「はやてちゃんを選んだだけあって、良い動きしてるね。」

「ああ、でもまだ若干危なっかしいな。今のところ順調だけど、あくまで“特訓の範囲内”での話だ…実戦となるとまた勝手が違ってくるからな…」

その様子を当然、なのは達も嬉しそうに眺める。はやての人を見る目が良いことは知ってはいたが、その事を改めて実感する教官2人であった。

「うわあ、やるね!アツシュ達…」

「ハイ…何だか、スバルさんとティアさんを見てるみたいです。」

「「えっ?」」

前衛向きで近接打撃でターゲットを叩くアッシュ、素早い高速連射で相棒をサポートしつつ敵を射抜くクレオ。相違点は多々あるが、その戦闘スタイルはスバルとティアナに通じるものがあつた。

「確かにはやても、そんなこと言つてたっけな。」

「…じゃあアンタはクレオの方ね。手間のかかりそうなことか似てそうだし…」

「ええー！？ティア酷いー！というかクレオに対しても酷いよね、まだそんな交流ないのに…」

ティアナの言葉にショックを受けてしょんぼりしつつ、スバルが軽く反論する。

「最初にあつた瞬間から感じてたのよ、どことなくアンタと同じタイプの人間だつて…だから自然とそうなるのかもね。」

「アハハ、じゃあさしずめアッシュさんは…ティアナさんタイプですか？」

「さあ、どうかしらね…」

エリオの問いをサラッと流すティアナ。

「みんな、ちゃんと見といた方が良いよ？そろそろ終盤みたいだし…」

なのはの言葉に再度電子画面に視線を向けるフォワード達。その言葉通り、クレオ達はゴール目前まで来ていた。

そのクレオ達も、ゴール付近を徘徊するターゲットの動きに翻弄されてペースを崩されていた。

《…ああ、もう！こいつら倒しちゃえばあとは楽々ゴールなのに…

一気に素早く、おまけに堅さも増してるし…》

《そりゃ簡単にはゴールされちゃ意味ねえだろ。とにかく、何とか一発で仕留めねえと限界だぞ…》

ゴールへ近づく度ターゲットの移動速度・強度も徐々にレベルが上がっているらしく、撃破にも手を焼いていた。時間制限がないとはいえ、あまり梃子摺る訳にもいかない。果たしてどう出るのか…。

「…アツシュ、ちょっと囧になってよ。」

「ハアツ!？」

一旦合流して2人で目の前を動き回るターゲットに視線を送る。すると唐突にクレオがアツシュに突拍子もなく提案する。

「お前、簡単にいうけど…、…わかったわかった。その代わりハマすんなよな…」

思わず反論しようとするアツシュだったが、数秒沈黙した後ぶつきら棒に答える。

「へへっ、んじゃよろしく!」

アツシュの返答にニイっと陽気な笑みを向けるクレオ。

その様子を画面で眺めるなのは達。

「何かするみたいだね、2人とも…」

「ああ、みたいだな…」

会話は聞き取れないが、教官としての直感から2人の様子だけでそれを理解する。次の瞬間、それは開始された…。

「あっ!」

クレオがターゲットに向かって射撃、しかし貫通はせず魔力弾は弾き飛ばされる。ターゲットはそれに呼応するように反撃にレーザー弾を放つが、2人は巨大な十字路で左右に分かれる。

(此处に来てどうする気かしら、んっ…?)

それを互いに逃げるクレオ達だったが、曲がり角に差し掛かった瞬間、クレオの姿が消えていた。

「あれ?クレオさんが消えた…!」

驚くエリオ。目標を見失ったターゲット達は周囲を探索するが見つからない、すると後ろから他のターゲットに追われながらクレオを追っていたターゲットの元へとダツシュで近付いてきた。

SOL:《Gluehen Schlag・「グリューエン・シュラク」》

「うらあッ!!?」

二手に分かれたと見せ掛けて方向転換、クレオが姿を消したと同時にアッシュが背後から攻める奇襲作戦のようだ。デバイスの電子音と共に両方の拳に炎のように揺らぐ魔力を纏わせる。

(チッ!)

しかし、攻撃は単調過ぎた為か回避される。それに反撃せんとレーザー弾を放つターゲット達。

SOL:《Gluehen Tritt.「グリュエン・トリット」》

今度は両足にも拳同様の魔力が施され、高く飛び上がる。攻撃を回避してアッシュはターゲットを土台代わりに踏みしめて上空へ飛び上がる。魔力付与が施されているのか、その跳躍力は横に聳える6階建てビルの屋上にまで達した。

(よっしゃ、今だ!)

GE:《Diffusion Barrett.「ディフューション・バレット」》

響く電子音、アッシュが着地したビルの反対にある3階建てビルの屋上から球状の魔力弾が発射された。しかし、それは下のターゲット達にはなくターゲット達のいる遥か上空であった。

「へへっ、これで決まりだ!」

発射したクレオが指を鳴らした瞬間、魔力球が爆発。地上にいるターゲット達に目掛けてレーザー状の魔力弾が豪雨の如く放射される。逃げ場を失ったターゲット達は反撃する間もなく破壊され、次々爆発する。

電子画面越しにその光景を目にするのは達も、少し驚きの表情を隠せずにいた。

「へえ、単調な奇襲と見せかけて上空から集中砲火か。悪くはないかな…」

「ただ命中精度がまだ今一つって感じだな。下手な鉄砲数撃ちや当

たる、威力で駄目なら回数でつてとこだな……」

「でも、どうやってあの一瞬でビルの屋上まで跳んだんでしょうね。」

「多分アツシユの使った魔法みたく、足に補助施してたんじゃないかな？きつと……さて、そろそろ行こうか？もう終わったみたいだし……」

その瞬間、ゴールを知らせる合図が空に鳴り響くのだった。

食堂

無事に全てのテストが終了し、クタクタの若手達はその後六課のメンバー達と交流の意味も兼ねて食堂で遅めの昼食と摂った。

「イヤ、参りましたよ。あそこまでしんどいなんて……」

「でも誰一人ギブアップもしないでクリアしたんだから、凄いと思うよ？ちよつと難易度高めだったしね、あのテスト……」

（あれで“ちよつと”だったの！？）

衝撃の事実に驚く若手2人は、思わず苦笑が漏れる。すると遅れてはやてとフェイトがやってくる。

「ええー、みんな今日はお疲れさま！無事に選考会が終了して良かったと思うてます。ちなみに結果発表は今夜中に厳正に選考して明日には連絡するから、今回落ちてしまったとしても落ち込んだらアカンでー？」

「部隊に戻っても“あの時選んでおけば良かった”って私達に思わせるくらい腕を磨いて……これからも頑張つてね？」

「……ハイツ！！」「……」

フェイトの優しい助言に力強い若手達の返事に、思わず笑顔を溢すなのは達であった。

会議室

それから数時間が経過、時刻は深夜11時半を過ぎていた。室内ではシグナムを除く隊長陣4人が合格者の審査をしていた。

「…………ふう、何とか決まったね。総合的なところを見ても、やっぱりこの子達かな…。」

「ああ、荒削りって感じだけど…。」

室内ではシグナムを除く隊長陣4人が、合格者の審査をし終えていた。

「うん、でも…選ばれなかった子達には申し訳ないな。落ち込んだりしなきゃ良いけど…。」

「相変わらず過保護だよな、フェイトはさ…。」

「まあまあ、そこがフェイトちゃんのええところやんか！さてと、早速部隊長さんのデスクに連絡しとかんと…。」

「あつ、じゃあついでにわたしがやつとくよ。この後少しやることあるから…。」

そう言つて席を立ち上がるのは。

「そうか？じゃあお言葉に甘えようかな、じゃあ…今日はこれでお開きや！」

その後、なのはは合格者が所属する部隊へ採用決定通知書を作成。部隊長の下へとデータを送信した。その文面の最後には、こう記されていた。

——合格者。陸士104部隊“クレオ・ハイゼット、アッシュ・スタリオン”両名。——

To
be
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

Epic・5 『選考会、開幕』（後書き）

T w i t t R o o m

（作者）

長げえええええッ！？思った以上に長くなっちゃった、おかげで後半駄文化した。クソッ、これなら前半後半と分ければ良かったか。でも引き伸ばしすぎてもアレだし…まあ、良いか…。

ハスバル・ティアナ・クレオ・アッシュ

決断早ッ！？

（作者）

そんな訳で第五話でした。クレオ達が使ったデバイス、魔法の詳細は明日にでも説明所に記載しておきます、興味のある方はご覧下さい。ではでは、感想お待ちしております。

機動六課隊舎・ヘリポート

選考会終了から4日、15人の中から六課への出向権利を勝ち取ったクレオとアッシュの2人。今日はそのクレオ達が機動六課へやって来る日であった。

「んー、もうそろそろ到着かな。」

「早く来ないかなー、ねえティア！」

「焦らなくても来るわよ、というか初対面じゃないんだから…そんな騒ぐことないでしょう。」

なのは、フェイトとスバル達フォワードメンバーに加えてヴィヴィオ達は2人を迎えようとヘリポートに足を運んでいた。

「ヴィヴィオ、2人が来たらちゃんと自己紹介するんだよ？」

「だいじょうぶ、ちゃんと言えるもん！」

両手をグツと握り締めるヴィヴィオの姿に笑顔を向け頭を撫でるフェイト。

「あつ、来た来た！」

時刻は午前9時32分、待ち焦がれる7人の前にヴァイスが操縦するヘリが着陸ポイントに降り立つ。着陸後、ゆっくりハッチが開けば中から2人の人影が見えた。

「よつと！」

「……………」

開いたハッチから飛び出て来たクレオに続き、アッシュがその後ろに続いて姿を見せる。

「あれ？高町教導官、それにスバル達まで…」

「お前らのこと出迎えるつつつてたからな、ほら…さっさと行つてやんな！」

2人の背中をヴァイスが押し、なのは達の元へ行けと急かす。

「あはは！2人ともようこそ、機動六課へ…」

「今日から一緒に頑張ろうね？2人とも…」

「ご指導ご鞭撻の程、お願いします…高町教導官、フェイト執務官！」

隊長達の歓迎に礼儀正しく敬礼を向けて挨拶をするアッシュ。

「こつちこそ、こんな良い部隊に出向させてもらえて…堪んなくやる気出ちやいますよ！」

（…このお気楽小僧はアアツ——！？）

相変わらずなクレオの態度にアッシュは心の中で声にならない声を上げつつ、横目で睨み付ける。

「ティアナ達も今日から宜しく頼むねー？」

スバル達にもブンブン笑いかけながら手を振るクレオ。

「アハハ、こつちこそね！」

「ハア…」

スバルが同様に元氣良く挨拶を返すが、ティアナは若干呆れ気味に溜め息を漏らしつつも小さく手を振る。

「ほら、ヴィヴィオもご挨拶…」

「…んっ？」

すると、なのはに背を押されヴィヴィオが前に出る。

「はじめまして、ヴィヴィオっていいいます！よろしくお願いします。」

「」

幼いながらキツチリとした挨拶を向けるヴィヴィオの姿にニカツと笑いながら視線を合わせんと、クレオが目の前で屈む。

「へへっ、初めまして！オレ、クレオ…！」

「上から読んでも下から読んでも“オレ、クレオ”とは言わねえのかよ…」

「ちよっ、それ言わないでよ。昔指摘されてから恥ずかしくって堪

んないんだから……」

「えっ？オレ、クレオ……ホントだ、おんなじー！」

アッシュの言葉に上下どちらから読んでも名乗りになる真実に納得して笑うヴィヴィオ。

（プッ！何でだろ、大して面白くないのに吹いちゃった……）

その後ろでスバルは不覚にも噴き出し、笑いを堪えていた。

「ところで、この子は？」

「なのはさんとフェイトさんのお子さんです。」

疑問を抱くアッシュにエリオが答える。

「ああ、2人の——……うええええええッ！？こつ、子持ちだったんですかアッ！？」

「あつ、その……えーつとですね……」

数秒の沈黙後、クレオが驚愕。その隣でアッシュもクレオほどではないが、驚きの色を隠せずいた。

廊下

その後、ヴィヴィオの経緯を聞いたクレオ達は苦笑しながら納得する。

「なーんだ、そういうことか。一瞬ビクリしちゃったよ……」

「イヤ、一瞬どころか相当してたじゃない……」

クレオの言葉に横槍を入れるティアナ。

「あはは！とにかく、今日から一緒に頑張ろうね？2人とも！」

「ああ、足引つ張らないよう精進するさ……」

スバルの笑顔と言葉に軽く微笑を向けるアッシュ。

「じゃあ、俺達八神二佐……じゃねえか。八神部隊長に挨拶行かなきゃなんないんでこの辺で……」

アッシュとクレオは途中の分かれ道ではやてのいる部隊長室へと向

かうべく、なのは達に別れを告げる。

「うん、わかった。部隊長室はすぐ先だから…わたし達もそろそろ行かなきゃならないから、後はスバル達が案内してくれる？」

「あつ、ハイ！ならあたし達1階で待つてるから後でねー？」

そう言くとスバル達4人はエレベーターのある方へと向かい始める。

「わかった！ヴィヴィオー、時間空いた時は一緒に遊ぼうなー？」

「んっ、うん…！」

陽気に片手を左右に振りヴィヴィオに手を振るクレオ。それに釣られてヴィヴィオも手を振り返す。その様子に、自然と笑みが零れるなのは達であつた。

フロント

その数分後、なのはやクレオ達と別れたスバル達元祖フォワードメンバーは4人揃ってフロント前で2人が来るのを待っていた。

「——それにしても…まさか同じ部隊の2人が揃って出向が決まるなんて、ちよつとビックリですよね。」

「うん、他の人達も凄かったけど…息の合い方1番良かったもん。」

4人は揃って3日前の選考会を思い出す。2人の息ピッタリな戦いっぷりは他の参加者の中でも郡を抜いていた、とても魔導師になつてキャリアが浅いとは思えないほどにと思うスバル達。

「きつと魔導師になる前からの知り合いなんじゃないの？幼馴染とか…」

「そのとおり、アイツら故郷も同じで家も近所だったそうだからな。」

ふと聞こえた声に振り向くと、ヴィータとシグナムが姿を見せた。

「ヴィータ副隊長、シグナム副隊長…！」

「やっぱりそうだったんですか。」

「ああ、何でも6つの頃からの付き合いだそう。今と違って当初はかなり仲が悪かったらしいぞ」

「へえ、確か今16歳だって言ってたから…10年来の、って…ホントですかそれ!？」

あれほど息の合ったコンビネーションを見せた二人が初見は犬猿の仲だった、その事実思わず耳を疑うティアナ以外の3人。

「喧嘩するほど仲が良いとは言うけど、アイツらの場合は“喧嘩したから仲良くなった”なんだろうな…」

「…なっ、何だか信じられないね？エリオ君…」

「うっ、うん…とてもじゃないけどそんな過去があったなんて思えないよ。」

「んっ？オイ、来たみたいだぞ…」

ふと隊舎内を見れば此方に向かってくるクレオ達を見つけるヴィータ。

「さて、私達もそろそろ行くぞ。ヴィータ…」

「んっ？ああ、そうだな…」

外回りに行くんだろうかと思いつながら、ヴィータとシグナムを見る4人。

「今から外回りですか？」

「ああ、今日は本局に用事があつてな…」

「今日はお前ら訓練休みだろ。色々アイツらに施設の案内とかしれやれよ、先輩なんだから…」

「あはは、大丈夫です！なのはさんにもさっき頼まりましたし…キツチリ先輩としての勤めは果たします！」

スバルの返答を耳にして、余計なお世話だったなと内心想うヴィータだった。

「そうか。では、またな…」

スバル達に別れを告げてヴィータとシグナムは出口から外へと出る。

「…それで、本当なのか？“手掛かり”が見つかったってのは…」

「ああ、向こうの連絡では然程大きな情報でなかったと言っ

るが…とにかく、この目で確かめてみるしかない…」
神妙な面持ちで語る副隊長2人。手掛かりの意味する物とは、やはり“あの事”だろうか…。

隊員宿舎

シグナム達が去った後、スバル達は訓練場以外の施設を2人に案内。そして、最後に隊員達が寝泊りする宿舎に訪れていた。

「ハイ、此処が君達2人の部屋…使われてない空き部屋だったけど、カーテンもシーツも新品！掃除も隅々までしておいたからね。」

スバル達はクレオとアッシュを寮母のアイナに紹介、2人が使用することになる部屋へ案内された。アイナの言うとおり、室内は塵一つ見当たらないほど綺麗に清掃されていた。

「うわっ、ホントだ！布団も枕もこれ見よがしに真っ白でフカフカ……くうーッ!？」

一足先に室内に飛び込み、二段ベッドの上に寝転び新品の寝具に喜びの表情を浮かべてはしゃぐクレオ。

「…アハハ、やると思ったー…。」

「ホントにあたしと同じ年なのか疑問に思うわよ…。」

二段ベッドでテンションの上がるクレオを見上げるスバルとティアナ。

「ありがとうございます、アイナさん…大事に使わせてもらいます！」

「これくらいいいお安い御用よ。じゃあ、あたしはまだ掃除が残ってるから…何かあったらいつでも言ってちょうだい。」

そう言うとアイナはスバル達の元を離れる。

「お前らもサンキューな、色々案内してもらって…」

「良いの良いの、これから一緒に頑張ってくんだから…仲良くして

かなきゃ！ねー、みんなそう思うよね？」

「ハイ！あつ、そういえばクレオさん達ってスターズとライトニング…どっちに配属かって決まってるんですか？」

「ああ、それなんだけど…」

新品の寝具を堪能し切ったクレオがエリオの疑問に口を開く。

「さつきはやってさんところに挨拶言つた時に“配属部隊は明日の早朝訓練まで秘密や”って言われちゃったから、オレ達もまだ知らないんだよねえ。」

「まあ、八神部隊長らしいっちゃらしいわね。一応言っておくけど、スターズ配属になった時は覚悟しときなさいよ？書類仕事はキチンとしてもらうから…」

「ハイハイ分かってますよー、というか…何でそうオレには冷たいのさ、ティアナは…」

ベッドの上から不貞腐れた表情を浮かべ、クレオが不満をぶつける。

「そりゃあ、お前の人格的な問題を考慮してだろ。」

「ええ、正にその通りよ…」

「ガーンツ！？そりゃないよ…」

幼馴染と同僚の容赦ない言葉にショックを受け、ベッドの淵に干された布団のように頂垂れるクレオ。

「アハハ、落ち込まないよクレオー！あたしは大歓迎だからさ…」

「ぼつ、僕もそうですよ！それにどっちの所属になっても、訓練とかは一緒なんですから…」

「そうです、エリオ君の言うとおりです！」

落ち込むクレオを笑顔で慰めるスバル、そして苦笑を浮かべてフオーするエリオとキャラ口だった。

「…ありがとう、やっぱり分かってくれる人は分かってくれるよねー！」

軽く身体を起こしてベッドから降り、感謝の言葉を述べるクレオ。

「ハアッ、けどホント…スターズになった時はビシバシ頼むわ。手間掛かるだろうけど…」

「心配無用よ、あたしも手間の掛かる相棒と一緒にやってきたし…
今更1人増えたってどうってことないわ。」

ティアナのその言葉にふとスバルに視線を送るアッシュ。

「手間かかるって、あのバカに比べたらずっとしっかりしてそう
だぞ？ 明るくて元気潑刺な感じで…」

「まあ、そのうち分かるわよ…」

クレオに比べてずっと局員らしいと述べるアッシュに、微笑みなが
ら意味深に答えるティアナだった。

（とてもそうは見えねえけどな。それにしても、アイツってどこ
なく…、…）

クレオと話し続けるスバルに視線を送り、何かを思うアッシュ。し
かし数秒沈黙した後、その浮かんだ“思い”を1人かき消す。

「――、……アッシュー？」

1人考え込んでいるとスバルの声が耳に入る。ハッと我に返ると自
分の顔を少し近距離で覗き見るスバルの顔があった。

「おわっ!？」

目の前にあるスバルの顔に驚けば数歩後退してしまうアッシュ。

「ムウ、何そのリアクション…!」

軽くムクれた表情を浮かべて文句をいうスバル。

「ああ、悪い悪い…ちよつと考え事しててよ。」

「考え事？ まさか…六課に来て密かに好きな人でも出来て、その人
のこと考えてたり――……ぐふっ!？」

次の瞬間、クレオの横っ腹にアッシュの肘打ちがクリンヒットする。

「お前と一緒にすんじゃねえよ!？」

「アッ、アッシュさん…何もそこまでしなくても…」

「こいつには毎回こんぐらいしとかなきゃ調子に乗っから良いんだ
よ、というか充分手加減してるから大丈夫だって…」

溜め息混じりに痛みに耐えるクレオを親指で指差すアッシュ。手痛
い仕打ちは何度か見てはいるが、流石にまだ慣れない様子のキヤロ
であった。

「んで、さっきの話は何だったんだ？」

「ああ、うん…そろそろお昼近いから食堂行かない？ってみんなで言ってたところ…」

「あれ？もうそんな時間か、早いな…じゃあ行こうぜ。」

部屋に設置された時計を見て、もうすぐ午後12時になりそうなことに気付けばスバルの提案に賛成するアッシュ。

「痛たたたッ、もう…ほんの冗談なのにさ、毎回参るよ。アッシュには…」

「大丈夫ですか？クレオさん…」

心配そうにエリオが声を掛ける。

「大丈夫大丈夫、というか男ならこういう叩き合いって普通だろ？もう慣れっこ慣れっこ！」

「ほほお、そんじゃ次からは3割増しでやっても良いんだな？」

「お断りだよ！！ほら、みんな早く行こ！行こ！じゃなきゃオレ殺される…」

「アハハハッ！」

コント染みたクレオとアッシュのやり取りを見て、色んな意味で面白そうな仲間が増えたなと思うスバル達であった。

地上本部・執務室前

同時刻、本局に到着したシグナムとヴィータ。2人は所属局員に案内されて執務室前にやって来ていた。

「…なるほど、データのハッキングはミットチルダのどこから行ったという訳か…」

「ハイ、手の込んだ改竄が行われていて…データの検索履歴を調べると時間は掛かりました。生憎、足取りは掴めませんでした…」

「何だ？」

局員はシグナム達を執務室内へ入れ、電子画面を開いて解析結果を閲覧させる。

「あのサーバーには誰かが無断でデータをコピーすると、逆に相手側の貴重な情報などを此方にダウンロードするというプログラムが仕込まれていたんです。そのファイル自体にも、サーバーの利用者以外閲覧出来ないようロックがかけられてましたが…」

「それがようやく解除に成功したって訳だな？」

ヴィータの言葉に首を縦に振る局員。

「ご苦労だったな、では早速見せてもらおう。」

「ハイ、どうぞ…」

局員は席を立ち、2人の後ろへと下がる。

「しかし、スカリエツィの使ってたモンがこっちで役立つことがあるなんてな。可笑しな話もあったもんだ…」

「フツ、確かに…」

ヴィータが席に座り、その背後からシグナムが覗き見るよう画面に視線を送る。画面にはコピーされたガジェットや生体実験に関するデータ、そしてサーバーにアクセスした者が使った端末のデータらしき物も入っていた。

「どれどれ、って…パツと見意味分からねえ数字とか並んでるだけか…」

「上のこれは、IDコードか何か…んっ？」

ふと画面上部のナンバーを見るシグナム。すると、何かに気付いたように電子画面を開き検索を始めた。

「やはりか、このコードの配列…そして、このコードで該当したのが…」

「…オイ、こいつ確か…」

「私は主はやてに連絡を入れる…」

すぐ様席を離れて、シグナムが六課へ連絡を入れ始める。

機動六課隊舎・部隊長室

「そうか、じゃあその人が…」

シグナムからの連絡を受け、発覚した事実を耳にして神妙な顔をするはやて。

《ハイ、過去の犯罪者データと…“以前管理局に所属していた”者のデータを照らし合わせた結果、昨日のハッキングはこの者の仕業だと判明しました。》

「しかし、随分おちよくられたモンやな。端末のコードが局員IDを後ろから並べたモンやなんて…」

《過去に起こした犯行の手口から見て、スカリエッティと同様に自己顕示欲が強い人格をしているようなので…おそらくわざとあの配列にしたのでしょう。》

確かにスカリエッティも地上本局襲撃直後にリアルタイム通信を入れて挑発行為を行っていた。端末コードを敢えてそんな風にしたのも、自分の行為を誰かにアピールする為の挑発かと感じるはやて。

「…スカリエッティみたいなんの再来とか、勘弁して欲しいわ。とにかく、詳しい話はまた戻ってきてからお願いしてええか？」

《ハッ！それでは失礼します…》

シグナムとの通信を終えるはやて。そして、1人室内で思いに耽り始めた。

（その人が動いてるってことは“あの連中”が活動始めたってことやろうか、今のところ何も起きてないけど…ちょっと嫌な予感がするな。）

その頃、場所ははやてが示唆した“連中”の本拠地。

「どうやら、向こうもこっちの存在を嗅ぎ付け始めたみたいね……」

「申し訳ない、ですが面白いじゃないですか。その方がスリルもあつて……」

男の余裕めいた口調に団長と呼ばれる女性は、ゆつくりと男性に近付く。

「……良い？私は計画に支障が出るのは大嫌いな、この程度だから良いけど……大失態やらかした時には、ホルマリン漬けだから……」

「……肝に銘じておきます……」

口調は穏やかだが、その醸し出される容赦のない殺気めいた雰囲気
に気圧されれば男性は素直に謝罪する。

「そつ、なら良いわ！さてと……」

団長は自分の定位置である椅子に腰掛け、どこかに連絡を入れ始める。

「どう？充填の方は済んでる？」

《もう数十分もすれば完了だ。》

「あらそつ、なら出掛ける準備はしておいてね？」

気楽に返答すれば通信を切る。

「……さあ、私達からの餞別をどう受け取ってくれるかしらね。管理局のクソ魔導師達は、……ハハ……アハハッ、アハハハハハハッ

……！！？」

（ホント、未恐ろしい人だな。この人は……）

1人高らかに狂喜する団長の背中を、内心ゾツとしながら見つめる男性。

不穏な空気が今、ミッドチルダの平穏を取り巻き始めるのだった……。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

Epic・6 『Peaceful and Disquieting』(後

T w i t t R o o m

ハはやて

何や、今回は私そんな出番ないやんか。せつかく私直々に選んだ子らが仲間入りしたんやし…もっと喋らせて欲しいわ。

ハ作者

今回はのほほんとした話だし、文句言わないで下さいよ。アンタ部隊長の癖に…

ハティアナ

でもあたしまでコント仲間にはしないで欲しいわね、あたしそんなんじゃないし…。

ハ作者

イヤイヤ、充分スバル相手にしてる時はツッコみめてるし……そんな訳で『Epic・6』でした。

(タイトルの意味は「平穏と不穏」です)

Epic・7 『変化する日常』

機動六課隊舎・隊員宿舎

早朝、スバル達は早朝訓練を受けるべく今日も朝早く起床。そこには、訓練場へ向かおうと進む元祖フォワード4人がいた。

「今日からクレオ達も交えた訓練だね、先輩として良いところ見せなきゃね！」

「ハイ、楽しみです。」

グツと握り拳を作り笑顔を見せるスバルに首を縦に振るキヤロ。

「楽しみなのは良いんだけど、5人に指示出すあたしの苦勞もちょっとは察してくれる？」

「アハハ、でもティアさんなら大丈夫だって僕は信じてますから……」

「そうそう、何だかんだでリーダーとして職務全うしてくれるところがティアの良いところなんだし——痛い痛い痛いッ——」

スバルの発言に耳を引く張るティアナ。

「アンタはいちいち一言多いのよ、バカ……」

ムツと不貞腐れながらスバルの耳から手を離す。

「あつ、そういえば肝心のクレオさん達ちゃんと起きてるかな……」

「そういえば、洗面所でも見掛けなかったけど……お2人は見掛けました？」

「ううん、まだ会ってないよ？」

「アッシュはともかく、クレオの方は寝坊とかやらかしそうで心配…… あつ、いた……」

ふとティアナが窓から外を見れば、既に準備万端な2人を発見する。クレオの方は未だ眠そうに瞼を擦っていたが、アッシュはしっかり

目覚めて1人シャドーボクシングを行っていた。

「んん、ッ……！こつちに来てても早朝はやること変わらないねえ、アッシュは……」

ウーンと伸びをしては身体を解すアッシュを眺め、クレオが眠たげに答える。

「うつせえよ、つーかお前はいい加減シャキツとしろ。眠いのはみんな同じなんだよボケ……」

「オーイ！」

宿舎内からスバル達4人がクレオ達の元に合流する。

「おつ、みんなお揃いだね……おはようさーん！」

「おはようございます、お2人とも早いですね？」

「六課に来て最初の訓練だっと思うと自然と早く目覚めてな、20分前から此処で準備運動してた訳だ。コイツは叩き起こしてやったけど……」

チラッとクレオに横目を向けるアッシュ。

「相変わらず仲良いねー、でも力加減は間違えちゃダメだよ？特に左手で叩く時は……」

「分かってるって、俺もそこまでバカじゃねえよ……」

アッシュの義腕を軽く指差しながら指摘をするスバル。その指摘に、アッシュは軽く軽く微笑してみせる。

「ほらほら、揃ったんだからみんな早く行こうよ！今日から新生フオワードメンバー6人、ガンガン突っ走ってこうよ！？」

「短期だけだね……」

気合満点で言い放った台詞をバツサリ切り捨てるティアナ。クレオは地面に膝から崩れ落ち、何故か落ち込んでいた。

「えーっと、クレオさん……？」

「何か落ち込んだじゃいましたけど……」

その様子に困惑気味な表情を見せるエリオとキャロ。

「そんなズバツと言いつつ切らないでよ、オレ結構ナイーブなんだから

…」

「あらそう、それは悪かったわね。ほら、さつさと立ちなさい！置いてくわよ…」

詫びる気配もなく言い放ち、訓練場へと歩き出すティアナ。

（ティアナのやつ、クレオの扱い方完璧だな…これで俺の苦労も少しは軽くなるつもんだ。）

クレオの性格を完璧に把握した上でのティアナの対処に、内心失笑気味に笑い安堵するアッシュ。

「ほらほら、アッシュも早く！」

「おつ、おつ…！」

不意に背中をスバルに押されて少々驚きながらも歩き始めるアッシュであった。

陸戦用空間シミュレータ

「おーし、全員整列！」

数分後、訓練場に揃ったなのは達はスバル達を並ばせて朝礼を始めていた。

「今日から新体制になるけど、みんな…一致団結して頑張ってるね？」

「……ハイッ！！……」

なのは、フェイト、ヴィータ達にまっすぐ視線を向けて力強く声を出す6人。

「よろしい！じゃあ訓練を始める前に、クレオとアッシュ…八神部隊長から通達があったように、ここで2人の所属する分隊を発表します。」

「待ってました！イヤ、八神部隊長勿体ぶるから気になって堪らなかったんですねー」

スターズかライトニング、一体どちらの所属になるのか気になりクレオ達に視線を向けるスバル達4人。

「フフツ、そつか…じゃあ発表するね。クレオはわたし達スターズの所属、アッシュはフェイト隊長のライトニング所属になるからね？」

所属が発表されれば、その分隊のフォワード達に視線を送るクレオとアッシュ。

（エリオとキャラと同じか、どっちも歳は下だけど実力的には相当だ…って聞いているし…力にならねえとな。）

そう心の中で思うと、反射的に右拳を左手にパンと軽めに当てアッシュは気合を入れた。

「じゃあ、そろそろ訓練始めよつか？」

「………よろしくお願いします……！」

再び声を揃える6人。これまでとはまた違った訓練が始まるという期待に、自然と声も大きくなるその様子に隊長陣も自然と表情が綻ぶ。

部隊長室

その頃、はやては部隊長室で神妙な面持ちのまま椅子に腰掛けていた。

「失礼しますです！」

「ああ、リイン！それにシグナムも…」

反射的に入室してきた2人に視線を向けるはやて。

「部隊長…頼まれたデータのコピー、持ってきました。」

「うん、わざわざおおきにな？」

シグナムの提示した資料には“以前本局に所属していた”局員の1人のデータが記載されていた。

「アレグロ・オースチン。12年前まで元地上本部所属の査察官だった男で…当時の資料によると、査察官としての腕は優秀で摘発した組織の数はかなりのもので将来も嘱望されていた人物だったそうです…」

「ただ、出世欲の強い利己的主義者だったそうで…地位の為に犯罪者も裏で利用していたそうです。それで、自分の汚職を摘発した同期の査察官を殺害して逃走…現在は重犯罪者として指名手配されているですよ。」

資料に写る男の写真、少々日焼け気味の肌に釣り上がった目付きをした男性。このアレグロこそ、再びミッドの平穩を脅かさんとする者の1人なのだ。

「ここ数年行方知らずやったのが、急に活動始めてスカリエツェイのアジトからデータをコピーのだけ為に動いた…とは考え辛いな、他に何か別の目的があったりとか…」

「それなんですけど、このアレグロって人以外にも最近…行方知れずだった重犯罪者が何人かミッドの田舎町などで目撃されたって報告が3件入ってます。今、他の部隊の方々が数名…秘密裏にそれを追っているそうですよ。」

電子画面を開いて、数日中に連発した目撃情報の報告データを写真付きで眼前に表示するライン。

「“例の連中”が動き回っているという噂は、濃厚かもしれませんね…」

「確実とは言われへんけど、可能性としては充分あり得るやろな…」密かに活動を始める組織だった存在。確実にその手はミッドへ伸びつつある、その事実には3人は揃って表情を硬くした。

「では、引き続き調査は続行しても構いませんか？」

「うん、頼むわ。私も出来るだけ情報集めてみるから…」

話を終えてシグナムは部屋を後にし、ラインは自分の席へと腰掛ける。

（正式に令状降りたら、ナカジマ三佐にまた共同捜査依頼してみよ

かな…)

そつと窓の外の景色に目をやるはやて。JS事件の時のようなことだけは何としても避けなくては、そつ心に誓うはやてだった。

陸戦用空間シミュレータ

場所はなのは達のいる訓練場へと再び戻る。

「うおおおおッ!!」

「…ッ、危ねっ…!」

そこではスバルとアッシュが、マンツーマンでの模擬戦を行っていた。

「うつひゃゝ、凄ッ…さっきのティアナも凄かったけど、参ったねこりゃ…」

「何言ってるんだ。まだ初日だったのに、そんなことじゃこの先大変だぞ…」

地面に腰掛け疲れた様子で戦闘を眺めるクレオにヴィータが横槍を入れる。

「うつ、そうですね…エリオとキャロでも10歳であんだけ強けりゃ、オレだって愚痴言いたくなるモンですって…」

「言うのは勝手だけど、アイゼンでぶっ叩かれたくなけりゃ自重しとけ。」

「肝に銘じておきまーす…」

先程までの教導で訓練の厳しさを実感したのか、ヴィータの台詞に冷や汗を流し小さく敬礼を向ける。

「まあまあ、でもクレオだって…さっきのティアナとの銃撃戦は結構良かったよ?」

「そつ…そうですね、クレオさん!最初にやった回避トレーニングだつて、最初の頃の僕らと違って軽々こなしてましたし…」

「そう？アハハ、あんがとエリオ！フェイトさんもサンキューです。」

フェイトの優しい言葉とエリオのフォローに上機嫌な様子を見せるクレオ。

「確かに良かったと思うわよ？あたしも…」

「マジで!？」

「ええ、ちょこまか動くモンだから本気で潰したくなったもの…」

ニコツと笑いながら言い放つティアナの言葉に、一瞬で表情を引きつらせ失笑するクレオだった。

「ティ、ティアさん…クレオさん怖がってますよ。」

「良いのよ、それにアツシュにも言われてるし…“クレオがスターズになった時はビシバシ頼む”ってね。」

悪びれる様子もなく微笑を浮かべ、内心楽しんでいる様子のティアナだった。

「アハハ、それにしてもやるね。初めて対戦するっていうのに、スバルの攻撃に即座に対応して防御も使い分けてるし…生粋のフロントアタッカー向きみたいだね、アツシュって…」

「マツハキャリバーみたいな高速機動力がない分、スバルより多く動き回ってるけどバテてる様子もあまりないし…スタミナもスバルには負けず劣らずって感じだね。」

繰り広げられる戦闘を観察しながらアツシュの戦闘スタイルなど、様々な面を分析しながら語るなのはとフェイト。

そしてスバルとアツシュの戦いも終盤に入っていた。

「オラアツ!？」

（右から大振り、避わせる!）

迫るアツシュの右フックを腰を深く落として回避するスバル。

（よし、此处だ!）

（…ッ…！続け様に肘打ち!？）

スバルが屈んだのを確認すれば素早く身体を反時計回りに捻り、左

肘で二撃目を放つアツシュ。

MC：《Wing Road・「ウイングロード」》

その瞬間、スバルの足元から後ろへ光の道が出現。咄嗟にマツハキヤリバーがローラーを急速回転させ、大きく後方へ後退する。

「うわつとと！？助かったよ、マツハキヤリバー！」

MC：《You are welcome・「どういたしまして」》
急な後退に驚きながらもバランスを保ち、愛機に向けて礼を述べるスバル。

（チツ、間一髪で避けられたか…時間もねえし、そろそろやるか…）
絶妙なタイミングで回避され悔しがるも、すぐさま雑念を捨ててウイングロードの上を駆けて接近するアツシュ。

MC：《Buddy, It approaches・「相棒、来ます」》

「うん、ラストスパートだね…行くよ！」

距離を詰め始めるアツシュに再び身構え、素早くアツシュへと距離を詰めるスバル。

「リボルバアアアツ——！！！」

リボルバーナックルの手首部分にある歯車状のナックルスピナーを回転させ、拳を強く握りながら声を上げるスバル。

「スウウウツ——……！」

その最中、スバルが高速接近してくるのを待っていたと言わんばかりに立ち止まるアツシュ。右手を握り、深呼吸しながら拳を後ろへ引く。

SOL：《Wirbel Schlag「ヴィルベル・シュラーク」》

ソルダートの電子音が響けば、拳から腕全体が微量に渦巻く魔力で包まれる。

「キャノン——！！！？」

「ハアアアアアツ！！！？」

同時に放たれる2人の拳。青と紫紺の衝撃が競り合いながら、火花

を散らす。

（チイツ、重てえ…ッ…！）

加速が付いていた分、攻撃を繰り出す速度も重なった分アツシュが押され気味になるも、負けじと両足で足場を踏みしめ耐えるアツシュ。

（結構スピード上乘せしたのに踏ん張ってる…でも、あたしだって…！）

—————ピーッ！！—————

その瞬間、終了の合図が空に響いた。

「ハーイ！そこまで、一度集合してー！」

なのはの声に拳を下げる2人。アツシュは相当力が入っていたのか、ガクツと脱力して息を上げる。

「ハアツ、正直危なかったぜ…やっぱ凄えよ、スバルは…」

「うっん！アツシュの方だって凄かったよ？拳かと思えば肘、膝かと思えば足って…力押しって言ってた割に変則的だから苦労したよ。」

「まあ、そう簡単に負けるわけにもいかないしな…ほら、行こうぜ？」

「うん！」

お互いを称賛し合いながら、見学中のティアナ達と合流して整列する6人。

「じゃあ早朝訓練はここまで、お疲れさま！」

「…………お疲れさまでした！！……………」

少々疲れた表情を向けるスバル達4人に対し、アツシュ達は個人差はあるもかなり疲労している様子だった。そして、業務に差し支えないようその場でストレッチを始める6人。

「2人とも、大丈夫？」

疲労しているクレオ達にフエイトが心配そうな顔を向ける。

「大丈夫ですよ、ッ…このくらい、というより…実感できましたよ。みんながどれだけ厳しい特訓受けて今の力付けたかっていうのが…」

「舐めてたって訳じゃないけど、驚いたのは確かですね。アハハハ
…」

いつもの陽気な態度も若干疲れたいるせいかキレがなく、失笑気味に返答するクレオ。

「でもまだ始まったばかりですし、これから慣れていきますよ！
ねえ、キャロ？」

「うん、私達も最初の頃はバテバテで…夜なんてベッドに辿り着くまで眠気と戦ってましたから…」

エリオとキャロの言葉に、今夜は寝るのに10秒とまらないかもと内心考えるクレオ。

「まっ、俺らは自分達の役割をしつかり理解して…みんなの足引っ張らないよう精進するだけさ。お前も気い引き締めるよな、迷惑するのは俺だけじゃねえんだし…」

「アッシュに言われなくても分かってますー！とにかく、毎度毎度人を上から見下ろしてるみたく言っちゃってさ…」

ブツブツ文句を垂れながらアッシュの横槍に不機嫌な顔をするクレオ。

「アハハ、大丈夫大丈夫…2人ともよくやってたよ？」

「そうだよ？最初は慣れるまで大変だろうけど、頑張ってね？」

「もちろん！」

上官2人の言葉にニカツと笑みを浮かべて即答するクレオ。その姿に、大きく溜め息を漏らすアッシュであった。

その頃シグナムはリインを引き連れ、先日訪れた地上本部の執務室前に来ていた。

「あっ、お待ちしていました！シグナム二等空尉、それにリインフオース曹長……」

「お疲れ様です、えつと……」

「ケイマン・ハワード准陸尉であります。本所属は出迎えの者が急な仕事で留守にしていますので、今日は私が……では、中へどうぞ。」

出迎えにきた齡30歳前後の男性局員のケイマンの導かれ、2人は執務室へと入る。

「すいません、此方から連絡を入れた方が早かったのですが……」

「いえ、今日は別件で近くに来る予定が入っていたので……それで、新しく入手した情報とは……」

「今データを開きますので……」

席に腰掛け電子画面を開くケイマン。

「……私も聞いたままを話しますが……このアレグロという男、データベースにハッキングしたあの日……今まで雲隠れしていた犯罪者達の下を訊ねて歩いていたそうなんです。」

「密会、してたんですか？」

「ええ、うちの1人は他の部隊の捜査部が追っついて……その密会現場を偶然発見したそうで、捕獲しようとしたのですが……」

「……殺されたのか……？」

ケイマンの様子にまさかと思い、シグナムが口を開く。

「ハイ……ですがその局員、咄嗟に手持ちの録音装置で会話を記録してたんです。ノイズが少々酷いらしいのですが……本日お呼びしたのも、そのデータを耳にしてもらおうと思った訳でして……」

キーボードを操作して、画面に音声データを表示するケイマン。

「命辛々情報を手したという訳か……」

「ですね、早速聴かせてもらっても良いですか？」

「分かりました、では……再生します。」

シグナムとリインは黙り込み、再生される音声データを再生させるケイマン。

《…ザザーッ、のか、？ザザーッ……お前達に、協力す、ザザーッ…》

《ハイ、ザザーッ、…団長^{ボス}は絶、…しますよ？確実、ザザーッ…》

途切れ途切れながらも再生されたデータを静聴する3人。

《…ザザーッ、から…、緒に来てく、…トイフェル…、誰で、ザザーッ…》

「…トイ、フェル…？」

ノイズ混じりな音声データを聴き終えるシグナム達。その最中、聞き慣れない名前を耳にして眉間に皺を寄せるケイマン。

「シグナム、さっきの名前って…」

「ああ、これで裏で動いている組織だった連中の詳細が判明したな

…」

機動六課隊舎・部隊長室

数時間後、シグナムの報告を受けたはやては神妙な面持ちで通信を受けていた。

「そうか、やっぱりその名前が出てきたんやね…」

《ハイ…やはりあの“例の事件”も、やはり“トイフェル”と名乗る組織の仕業かと…》

シグナムとの通信の最中、はやては電子画面にある事件の詳細データを表示する。

「数週間前…第25管理世界で起きた大規模な謎の爆破事故、その事件調査へ行つた局員数十人が殺された惨殺事件。主犯と思われる魔導師の男、おそらくアレグロと見なして間違いなしやな…」

《ええ、事件被害者の者達も…何人かその単語を口にしていたそうですから…》

《過去のリストも見たんですけど、そんな名前の組織は該当しなかったです。おそらく新設して以降大きな行動を始めていなかったと思うです…》

「そうか、とにかく2人とも…帰りは気を付けてや？私らが捜査始めたことぐらい今頃勘付いてるかしらんし…」

《ハッ！》

そのまま通信を終えるはやて。その瞬間、電子画面に何かのデータが送信されてくる。

「…来たな…」

データを開くと、管理局の上層部からの伝達文が表示される。はやては予想通りと思いながら“捜査令状”に目を通し始めるのだった…。

ミッドチルダ・某山岳地帯

場所はミッドチルダのとある山岳地帯。その崖の上に、2つの人影があった。

「…フウ、ようやく到着か。参りますよね…出現ポイントがこう都会から離れていると…」

「文句言ってんじゃない、良いから行くよ？あたしら“組織”の初陣なんだから…わかってんの？アレグロ…」

「ハイハイ、分かってますよ。」

その言葉に仕方なさそうな表情を浮かべながら同意する男『アレグロ・オースチン』、同伴する仲間と思しき女性はその態度にイラ付きつつ行動を促す。

衝突の火蓋は、今正に切られようとしていた…。

T o b e c o n t i n u e . . .

Epic・7 『変化する日常』（後書き）

T w i t t R o o m

〔作者〕

ああ、参った参った。風邪治ったは良いけど修正やら何やら難航した…病み上がりなのか頭がチツとも働かない、睡眠不足ってほどでもないんだけど…さあ、今のネタ分かった人ー？

〔はやて〕

多分そうはおらんのんちゃう？キテ・ツって古いねん、時代は最先端求めてんねんで？

〔作者〕

激しく放っておいて下さい！んな訳で、いよいよ次話より本格的な戦闘編突入しまーす。頭働けば良いけど…

Epic・8 『First Scramble』

機動六課隊舎・会議室

時刻は午前10時を過ぎた頃、六課の会議室にはなのはを含めた隊長陣5人とラインが集まっていた。2日前、シグナムとヴィータの得た情報により判明した“トイフェル”と呼ばれる組織だった存在現在、なのは等ははやての元に正式に送られてきた“捜査令状”に目を通しながら神妙な面持ちで会議を行っていた。

「――2週間前の局員襲撃、スカリエツィのデータベースへのハッキング…そして同じく指名手配されている犯罪者との密会…」

「この行動パターンからして、今は大きな破壊活動はしないで勢力の拡大や下準備の為にアレグロって人が上の命令で動いてると推測…うつん、そう思っただけだね。」

フェイトの言葉に同意見だと言わんばかりに静かに首を縦に振るのは達。

「連中の足取りは今のところ本局の捜査官とかが追ってるらしいけど、雲隠れが得意なやつらみたいで…相当難航してるってよ。」

「襲撃事件以来、大きく取り沙汰される動きは見せてはいないが…今後、確実に今まで以上の事件を起こす気なのは確かだろう。」

「それを阻止する為に、私等にも捜査協力の礼状も降った。これからは最前線でトイフェルのメンバー逮捕、組織の壊滅を軸に動くことになると思うけど…みんなも充分用心してや？」

「分かってる、どんな時でも全力全開がわたしのモットーだからね。」

はやての気遣いに優しく微笑み、軽く拳を握り締めアピールするな

のは。それに乗るように、フェイトやヴィータ達も先程と同様に首を縦に振った。

「そうかー、頼りにしてるで？」

「まあ、今は情報集めに徹してくれてる奴らを当てにするしかねえのが現状だけど…」

「ヴィータちゃん、それを言ったら身も蓋もないですよー！」

「私も今日からの仕事、情報収集にシフトチェンジするし…絶対に手掛かりが掴めるよう頑張るよ。でも、スバル達の教導は出難くなるかもしれないかな…」

申し訳なさそうな表情でなのはとヴィータに視線を向ける。

「アハハ、そんな顔しないで…フェイトちゃんは執務官としての業務があるんだから！」

「104の2人含めて、訓練はみっちり鍛えといてやるからさ…」

「フフツ、じゃあひとまず…今朝はここまでにしとこか。」

そういつて席を立ち、業務へ向かう準備を始める。

「そういえばなのはちゃん、クレオ達の方はどんな感じ？」

「んっ？まあ、まだ序盤だからね。夜になる頃には2人ともへ口へ

口気味だけど…大丈夫、どっちも芯の強い子みたいだから！」

「そやな！2人とも、局入りになる前から相当苦労してきたらしいからなあ。」

オフィス

その頃オフィスでは、フオワード6人が早朝訓練の反省レポートを纏めていた。

「よし、つと…終了！」

「オレも、ハアッ…」

「大丈夫ですか？クレオさん…」

同様にレポートを完成させたエリオが項垂れるクレオに視線を向ける。

「大丈夫大丈夫、それに反省レポート作成で項垂れてるんじゃないよ…」

「ひよつとして、訓練疲れがまだ残ってます?」

「気遣うようにキャロがクレオに声を掛ける。」

「104への定期報告書があるからだよ。昨日出向前に伝え忘れてたからって上官から俺らに連絡あつてな、月末には必ず報告書をデスクに送れって…」

クレオの代わりにレポートをちょうど完成し終えたアッシュが述べる。

「そう、じゃあさつさと作成しちやいなさい。時間が勿体無いわよ…」

「わかつてるよ。だから今は小休止だよ、小休止…」

ティアナの言葉にムクツと上半身を起こし、再び仕事を再開するクレオ。

「アハハ、でもあたしはクレオの気持ち分かるかなー。」

「最初の期限は来月の月末だ。期間は充分あるけど、出来たら爰は添えていてくれ…エリオとキャロもな?」

「わつ、わかりました…任せて下さい!」

アッシュの頼みに苦笑しながら返答するエリオ。

「あつ、そろそろ行つとかねえと…悪い、ちよつと抜けるわ。」

ふと時計に目をやれば、アッシュが腰を上げて出入口の方へと歩き出す。

「あれ、どこか行くんですか?」

「これだよ、これ…」

キャロの問いに自分の“義腕”をポンと数回叩きアピールするアッシュ。

「こっちにいる間はメカに強いシャーリーさんがコイツのメンテしてくれることになってんだ。一度じっくり見てみたいって言うから

顔出しにな。いざ戦闘になって、肩外れでもしたら洒落にならねえからよ…あとシャル先生のところにも鎮痛剤貰いに…おっと、じやあ行くな。」

「いつてらっしゃーい！」

オフィスから廊下に出るアッシュの後ろ姿を見送る5人。

「鎮痛剤って…やっぱり痛いんですか？その、腕付ける時って…」

「まあ、直接腕の神経を義手と接続させるからねえ。そりやもう堪えない激痛が走るらしいだよねえ、アッシュもその時の痛みだけは未だ慣れないって言ってるし…」

クレオがニヤニヤ悪戯チックな口調でスバルやエリオ達に語る。その痛みを想像したのか、スバル達の顔色が若干引き攣る。

「けど大変そうだね、アッシュ…毎回毎回そんな痛みに耐えなきゃなんないなんて、お風呂とかどうしてるの？」

「特殊合金耐水耐熱はバッチリだし、しっかり水分拭き取ったりしてるし、心配ないない！あつ、それとも…スバルがアッシュの背中流

クレオが言い切る寸前、脳天にティアナの手刀がヒットした。

「…ジョ…ッ、ジョーク…だっ…てば…」

当たり所が良く相当痛かったのか、大袈裟に気を失う動作を見せるクレオ。

「ハイハイ、みんな仕事終わったんでしょ？他の人の邪魔になるから出るわよ…ほら、アンタもさっさと来る！」

（ティアアってば、悪さしたペットじゃないんだから…）

クレオの首根っこを持ち室外への移動を促すティアナ。その様子に同情の念を送るスバルだった。

場所はロングアーチの拠点とも言つべき六課の管制室。はやての他、グリフィス・アルト・ルキノの3人は室内で休息を取っていた。

「八神部隊長、コーヒーです。どうぞ…」

「んっ、ありがとうなグリフィス君…、…。」

自分の席に腰掛け、モニターを眺めながら静かにコーヒーを啜るはやて。その様子をルキノが静かに見上げていた。

「ねえ、最近八神部隊長…ここ数日ああやって考え事してることも多くない？」

「ここ最近動き回ってる集団のことだよ、多分…。今朝も隊長達会議してたみたいだし、六課にも正式な捜査協力依頼も届いてたらしいよ？」

はやてを様子を伺いながらルキノとアルトが小声で話す。

「そっか…また忙しくなりそう、かな？」

「多分ね…でも八神部隊長のことから、心配してても『大丈夫、心配無用や！』って笑顔で言うよ、絶対…」

「ハハッ、そうだよな。」

はやての性格を考えれば、そう返答するに違いない。そう思えばお互いに苦笑を向け合う3人。

「何や楽しそうやね、私も混ぜてええか？」

「やつ、八神部隊長！？驚かさない下さいよー!？」

いつの間にかニヤニヤと2人の傍に現れるはやて。それに驚き、胸元に手を添えながら困り顔を向けるルキノ。

「ごめんごめん、許してなー？」

陽気に部下2人に向けて笑顔を見せるはやて。その様子を、遠目からグリフィスが静かに眺める。

ミッドチルダ某所・森林地区周辺

その頃、場所は建築中のダムがある森林地区。そして、そのダムから続く河の下流から上流に聳えるダムを眺める2つの影があった。《――そう、トラブルなく到着したの…じゃあ、手筈通りよろしく。忠告しておくけど、命令以外の行動は絶対しないこと…やったら殺すわよ。》

「分かってるわよ、任せなさい。団長の方針には従うからさ…アンタの方こそポッドから出たばっかだし、その辛口はそっちに戻つてからにしてちょうだいよ。エテルナちゃん…」

「それに心配いりませんよ、僕も一緒になんですから…」

そこには指名手配中のアレグロと、仲間らしき女性が“エテルナ”と呼ばれる女性と通信を行っていた。

《むしろアンタが一緒だから余計に不安なのよ、それじゃ…》
アレグロの言葉をサラツと聞き流し、通信を切るエテルナ。

「…どうにもキツイですね、ウチの組織の女性陣は…」

「いいから、さっさと行くわよ。わざわざこんなダッサい格好までして此処まで来たんだから、早く済ませましょ…」

そのまま歩を進め、川沿いから上流へと向かう2人。その服装は“釣り人”の男女そのものであった、果たしてその行動の目的は…。

機動六課隊舎・メンテナンスルーム

場所は戻った六課隊舎。アッシュ1人はシャーリーに義腕を見せにメンテナンスルームを訪れていた。

「…なるほどなるほど、間接部はこうなってる訳か…ありがとう、アッシュ！」

「イヤ、それは俺の台詞ですよ。こっちこそ仕事の合間だったのに…んっ？」

義腕を外している状態で椅子に大人しく腰掛けて礼を述べるアッシ

ユ。その刹那、自動ドアが開く音を耳にして反射的に視線を送った。
「あら、ちょうど見終わったところかしら？」

「やつほー、アツシュ！」

「シャル先生、スバルにエリオも…」

そこにはシャルマルにスバル、エリオの3人が姿を見せる。

「ちょうど良かったわ。これ、鎮痛剤ね…」

懷から取り出した薬を、シャルマルがアツシュの傍に置く。

「すいません、わざわざ…んで、お前ら2人は？」

「もう、つれないな！みんな休憩スペースでオヤツ食べようと思
つてエリオと迎えに来たのに…」

「アハハ！さて、鎮痛剤も来たことだし…早いところやつちゃおっ
か？」

シャーリーが義腕の接続部分をアツシュの腕に近付ける。その様子
を、スバルとエリオは遠慮気味ながらもジッと視線を向けていた。

「——…オイ、そんなに凝視されたらやり辛えよ…」

「あつ、そうですね！つい見入っちゃって…」

軽く苦笑を浮かべながらエリオが謝る。

「物珍しいっちゃ物珍しいしね。じゃあ改めて、せーの…！」

「いでツ！！？」

（うわー、何か見てるこっちまで腕の付け根痛くなりそう…）

神経接続が終わり若干涙目になりながら鎮痛剤を飲むアツシュ。先
程のクレオの言葉を思い出しながら、立ち尽くすスバルとエリオで
あった。

休憩スペース

その後スバル達はアツシュを連れて仕事が一段落したなのはやフェ
イト、ヴィヴィオと一緒に寛ぎ始めた。

「ヴィヴィオ、これも美味しいよ！食べるー？」

「うん、食べるー！」

テーブルに置かれた皿に乗ったクッキーを手にとって差し出すスバル。ヴィヴィオは嬉しそうに頷き、それを受け取る。

「へへっ、やっぱり和むねー！こういう反応見ると…」

「クレオさんって、小さな子好きなんですか？」

クッキーを一口食べながらキャラがその様子を見て訊ねる。

「んっ？まあね、というか子供嫌う理由が分かんないよ。特にこーんな素直な娘はさ…」

「聞き間違えると危ない発言に聞こえっけどな…」

「ちよつとー、余計な茶々入れるなよなー！」

ズバツと言いつアツシュの横槍に文句を垂れるクレオ。

「アハハ、にしてもアツシュ…まだ痛んだりしない？痛み止め飲んで時間浅いし、無理しないでね？我慢は身体によくないし…」

「だっ、大丈夫ですって！それに痛みが強いのは一瞬だけだし…」

「そう？だったら良いけど、何かあったらすぐに言うんだよ？」

心配気なフェイトの態度に気圧され気味になるアツシュ。その様子になのはは自然と微笑を浮かべた。

「そうだね、無理は禁物だよ？2人とも…訓練の方もどんどんレベル上がっていくし、オーバーワークだけはしないでね？訓練だけじゃなくデスクワークも大事な業務だし、定期報告書の方もちゃんど完成させるんだよ？」

「イエッサー、でも休憩中なんだから仕事の話は無しにして下さいよー…。」

訓練の方とはかく、書類仕事の話は勘弁してくれと言わんばかりに脱力するクレオ。

「アハハ、ごめんごめん！」

「クレオさん、おつかれ？んしょ、っと…」

脱力したクレオを気遣ってか、目の前にお菓子如山積みにして置くヴィヴィオ。

「いっぱい食べて、お仕事頑張ってください！」

「…くうーッ！…やっぱり良い子だなー、堪なく良い子だなー！ヴィヴィオって…」

幼い少女の優しさに感激しながら大袈裟に喜びを露にするクレオ。

「アハハッ！クレオってば大袈裟なんだから…」

「見てるこつちが恥ずかしいわね、同い年として…アンタもホント、大変ね…」

スバルの隣でティアナが静かに紅茶を啜りながらアッシュに同情する。

「イヤまったく、落ち着きのねえ弟持った気分だぜ…」

「コラコラ、そんな風に言ってあげないの！でもホント、アッシュ達って幼馴染というより兄弟っぽいよね。」

「あつ、それはあたしも思ってた！そういえば…アッシュって兄弟はいるの？」

興味本位でスバルがアッシュに訊ねる。その質問を耳にしてなのはとフェイト、クレオがチラッと視線を向けた。

「んっ？ああ、上に姉ちゃんが1人いるな。俺達が所属してる104部隊の“元”局員で歳は7つ違い…」

「そうなんだー！お姉さんが…、んっ、元？今はいないの？寿退社とか？」

頭に“元”が付くということは、現在は退職したのか。そんな疑問を抱きながらスバルが再度質問する。

「あの、えつとねスバル。アッシュのお姉さんは…」

「殉職したんだよ、7年前に災害事故で…俺もその時の事故に巻き込まれてな。左腕もこの様ってわけだ…」

「あつ…」

フォローを入れようとしたフェイトの言葉に被るように、義手に触れながら語るアッシュ。腕を無くした経緯は聞いていたが実姉も事故で亡くなっていた事実は初耳だったため、スバルはもちろんティアナ達も言葉を失った。

《…バカ…。》

ティアナが念話を送りながらスバルを睨む。

「えっ、えっと…ご、ごめん…!」

「良いって、それに——」

慌てて謝罪するスバル。その姿にアッシュが言葉をかけようとしたその時だった。

——ビーンツ! ビーンツ! ——

突然、六課隊舎内に警報が鳴り響く。

「えっ、何々!？」

厳戒態勢のアラートが響き渡り、何事かと咄嗟に席を立つフワード面々。

「なのは、これってひょつとして…」

「うん。多分きつとそうかも…みんな、急いで!」

真剣な面持ちでフワード陣に声をかけるなのは。そして、スバル達も揃ってなのはの後に続く。

響き続けるアラート、それが意味するものとは…。

T o b e c o n t i n u e . . .

Epic・8 『First Scramble』 (後書き)

* T W i t t R o o m *

〔作者〕

さーさー、随分間が空きましたが次からは本格的なバトルです。クレオ達が六課に来て日も浅い中、フォワードメンバー達は上手くコンビネーションを発揮出来るんか。胎動する犯罪集団『トイフェル』とは…… フウ、ようやく前半戦終盤にこぎ着けられたか。

〔なのは〕

今回はスターズ・ライトニング・ロングアーチ、台詞の多さはとにかく殆どのメンバーが登場してるから会話の場面とか大変だったそうだよ？

〔ヴァイス・ザフィーラ〕

……。 (何かを訴える眼差しでこちらを見ている / 今回会話・登場場面無し)

〔作者〕

そんな目で見えるなー！？配分大変なんだよ！！そんな訳で第8話でした。

Epic・9 『開戦（前編）』

暗躍を始める犯罪組織『トイフェル』。組織壊滅の為、捜査協力の依頼が上層部から機動六課へと送られてきた。まるで波紋が広がるようにその影を徐々に色濃く伸ばし…そして、その魔手は今正にミッドチルダへ伸びるのだった。

機動六課隊舎・管制室

「ミッド南東の森林に……ガジェット出現、機体数：約80ツ!？」モニターに映る無数の大群、紛れも無く『ガジェットドローン』だった。元々はロストロギア『レリック』を狙って出現する機械兵器で、JS事件時に『聖王のゆりかご』と共に所有者でもあった『ジエイル・スカリエッティ』のアジトで最後をとにしたハズである。そう思いながら映像を見るグリフィス達だが、そのガジェットは自分たちが知る物と少し違っていた。

「黒い、ガジェット…」

I型・?型とタイプの違いはあるが、ボディは全て『青』が基本色のガジェット。しかし、モニターに写るガジェットは全て『黒』が基本色だったのだ。

「グリフィス君、状況は…?」

直後、はやてが管制室に現れる。そして入室の際にモニターに目をやればガジェットの姿に内心少し驚いていた。

「空と陸の両方から、建設中の洪水調節用ダムに向かっているようです!」

「ロストロギアの反応は?」

「ありません！部隊長、やはりあのガジェットを差し向けたのは…」
大体の予測ははやての中では付いていた。

「言わずもがな、トイフェルの連中やろうな…」

サツと自分の席に腰掛けて通信を入れ始めるはやて。

ヘリポート

その頃、なのはとスバル達は屋上のヘリポートに到着していた。

《なのは隊長、状況はもう伝わっとる？》

はやてからの通信が、なのはに入った。

「うん！いつでも出動OKだよ？」

《ダムの下流には小さな市街地がある。今地元部隊の人らが避難誘導とかしてくれとるけど、決壊したらそれこそ甚大な被害が出てまう…何としてでも防いでや！》

「大丈夫、させない！いつもどおり全力全開で行くから…！」

《そうか、頼んだよ？》

絶対に阻止するとはやてに強く約束するなのは。そして、その言葉を心から信用してはやては通信を切る。

「みんなにもさっき話した通り、今回の事件はトイフェルと名乗る犯罪組織によるもの…わたし達は今後その組織のメンバーの逮捕を主に動きます！現場で敵と鉢合わせたら必ず連絡してね？」

「……ハイッ！！……」

フェイトの言葉に6人揃って声を上げ、力強く返事をするスバル達。
「なのはさん！こっちはいつでも行けますんで…」

「うん、分かった！」

搭乗口から顔を覗かせ、準備完了を知らせてきたヴァイスに返答。
すぐさま号令をかけ、スバル達を整列させるなのは。

「任務はダムの決壊阻止、及びガジェットの全機破壊！地上はみん

なに任せるから、しつかり頼むよ？」

「クレオとアッシュは六課に来てから間もない初出勤になるけど、決して無理はしないようにね？」

「了解ッ！！」

六課に出向してから最初の出勤。104部隊では現場に出ている経験があるとはいえ、まだ危なっかしい面もある。そんなアッシュとクレオにフェイトは念を押すように注意した。

「へへっ、よし…やる気漲ってきたーッ!？」

六課へ来て間もない初仕事、緊張するどころか1人意気揚々とやる気を出すクレオ。

「…お前、こういう時ぐらい締めろっつも!?ピクニック行くんじやねえんだぞ…」

「まあまあ、アッシュ…抑えて抑えて!」

どうにも気の緩いクレオに怒鳴るアッシュを、苦笑しながら宥めるスバル。

「フォローはしてあげるから、せいぜい気を付けなさいよね?アンタ達…」

「言われなくとも、手間は取らせねえようには尽力するって…」

役割は全力で果たすと言わんばかりに返答し、拳を右掌にパンツと当て気合を入れるアッシュ。

「あっ、ヴィータ副隊長達来ましたよ!」

キャロの声に振り向く一同。ちょうど別件で外回りに出ていたシグナムとヴィータが遅れて姿を現した。

「スマン、待たせたな…」

「よし、全員揃ってんな…ヴァイス、乗ったらすぐ出発せろ!」
ヴィータの声を合図に、なのは達はへりに駆け足で乗り込んだ。

「そんじゃ、いっちょ行きますよ…!」

全員搭乗したことを確認すれば機体を離陸させて空へと浮上、目的地へと発進した。

ミッドチルダ南東部・ピアジオ地方

南部の『アルトセイム』地方と同様に自然に溢れ、水質汚染のない大河が自慢のピアジオ地方の森林地帯。その大河の上流には建設中の『ピアジオ第一ダム』が大きく聳え立っていた。そして今、そのダムを破壊せんと下流から無数のガジェット（黒）達が地上・空中から接近しつつあった。

「こうやって任務に駆り出されるは良いけど、今回は監視役だけか……また暴れたかったんだけどなあ、せつかくダムの近くまで行ったのに……」

その遙か遠方、崖の上には電子モニターでガジェット達の侵攻をボロと眺めるソーシと同伴の女性がいた。

「無駄な戦闘はNGって言われてるんだから我慢しなさいよ。それに、壊すモンはたっぷり観察してから壊した方が達成感あるでしょう？今日はあの改良した玩具達の“性能テスト”がメインなんだから、ただでさえ管理局が本格的に動き出して行動制限され出してんだし……」

「でも、たまにはのんびり外で日向ぼっこも悪くな——うぐほッ！？」

そう言つて欠伸を溢せば、その場に寝転がるソーシ。その態度を見てか女性がソーシの腹を強く踏み付けた。

「……それ以前に、アンタがキザッたらしく組織の名を口にしたせいで動き難くなつたんでしょ！紳士気取りも大概にしなさいっての……」

「痛い痛い痛いッ！？レ、レヴィンさん……あつ、足退かして下さい——……あつ、あれ……」

腹を踏まれ続け苦しんでいると、空の彼方を指差すソーシ。その指先を追うように視線を向けると1機のヘリが上空を飛んでいた。

「へえ、早い到着ね…」
ソーシの腹の上から足を乗せたまま、振り向き様に小さく呟く“レ
ヴィン”と呼ばれる女性。

ヘリ内部

ダムに向かうヘリの中、なのはやスバル達は各々座席に腰掛けて現
場上空に到着するのを待つ。

「もうすぐか…ねえ、アツシュ。さっきは——…んっ？」

何かを伝えようとスバルがアツシュに視線を向けるが、その様子に
言葉を途中で止めてしまう。

「アツシュ…？」

（…いよいよか。まさかこんなに早く出勤するとは思いもしなかつ
たな。こいつは、いつも以上に気い引き締めないとダメだな…）

アツシュは外の様子を真剣な眼差しで見ながら考え込んでいた。決
して緊張している訳ではないが、スバル達との共同任務は今回が初
めて。任務遂行の為にもし下手な失敗はしないようにとアツシュは自
分に言い聞かせていた。

「アツシュさん、緊張してますか？」

その様子を同じく気付いたのか、隣に腰掛けていたエリオがそつと
声を掛ける。

「んっ、多少はな…ありがとな？心配してくれてよ…」

小さく笑みを向ければエリオの頭を数回優しく叩くアツシュ。

「緊張感を持つのは悪くないが、お前のように生真面目なやつは多
少力が入っている方がちょうど良いかもしれないな…」

「シグナムの言うとおりだ。それにスターズは今、下手に緊張され
ても困るのが1人いるし…お前が代わりに気を張っとけ。」

ヴィータの言葉にシグナムとアツシュは同時にクレオを見て、その

言葉の意味を納得する。

「すいません、あんな相棒で…」

どう見ても緊張する柄ではない、むしろ一番肩の力を入れては拙い人物だろうと思う副隊長陣。そんな相棒の様子を見て、脱力交じりに謝罪するアツシュだった。

「まあまあ、2人とも…というかあまりそんな風に言わないで上げてよ。クレオだって態度には出さないだけで、緊張してるハズだし…」

苦笑気味にフェイトがシグナム達に言葉を掛ける。

「何かオレの評価って、既に下降気味なんですね。オレだって頑張ってるのになあ…」

会話を耳にしていたらしく、若干機嫌を損ね気味にクレオが不貞腐れる。

「あはは、大丈夫！わたしはクレオのそういう誰にも負けないポジティブさは、ちゃんと評価してるよ？」

「マジですか、よっしゃ！」

なのはの言葉にスイッチでも切り替えたように機嫌を取り戻すクレオ。その現金さにティアナとアツシュ、ヴィータは溜め息を漏らした。

「まあ、俺からすれば…キツチリ援護とかこなしてくれさえすれば、アイツがバカだろうが何だろうが構わないけどな…」

「アハハ、アツシュってばキツいなー…頑張ろうね？」

「んっ、おう…分かってるって…」

不意に肩に手を添えて優しく笑顔を向けるスバル、それに照れたのか若干頬を赤らめるアツシュ。その様子を見てなのはは1人クスツと笑みを溢すのだった。

「…さて、そろそろだね。ヴァイス君、ハッチ開いて！」

「うつす！」

目的地であるダム上空周辺に到着すれば、ヘリの後部ハッチを開くヴァイス。

「じゃあ作戦通り、地上はヴィータ副隊長達とフォワードメンバーで…空はわたしとフェイト隊長で応戦します！くれぐれも無茶はしないように…」

「……ハイッ！！……」

スバル達の返答に笑顔を浮かべ、なのははフェイトと共にハッチの外に視線を向ける。

LH、BA：《Set Up・「セットアップ」》

レイジングハート、バルディッシュを握る2人。そしてデバイス達の電子音と共に、バリアジャケットが装着される。

「ヴィータ副隊長、シグナム副隊長…地上は頼みますね？」

「ハッ！」

その言葉に、ピツと敬礼を向けるシグナム。

「「スターズ（ライトニング）01、行きます……！！」」

掛け声と共になのは達はハッチから飛び出し、群集する空のガジェットへと素早く接近する。

「なのは！」

それから間もなく、全翼機タイプの黒いガジェット？型の大群を発見する。

「じゃあ行くよ、レイジングハート！」

LH：《Acceler Shooter・「アクセルシューター」》
アクセルシューターで先手を放つなのは。迫る誘導射撃にAMFを張るガジェットだが、うちの数対は対応が間に合わず破壊される。

「よし、次はあたし達だ…地上のガジェットは森の中を二手に分かれて進行中だ、こっちも二手に分かれて迎撃するぞ！」

「……ハイッ！！……」

なのは達の戦闘開始を確認すれば、ヴィータが作戦を指示。それに応えるように、スバル達も力強く返事をした。

「まずあたし達が出て地上を抑える、遅れんなよ？お前ら！」

「行くぞ、ヴィータ……」

待機状態のレヴァンティン、グラーフアイゼンを握り揃って騎士甲

胃を纏えばハッチから地上へと飛び立つて行く副隊長陣。

「アイゼン！」

GLA：《Schwalbefliegen》「シュワルベフリーゲン」》

上空からガジェットへ接近する最中、左手を軽く振って赤い魔力光を纏った鉄球が4つ出現させるヴィータ。

「うりゃああああッ！！」

片手でアイゼンを横薙ぎに振るって鉄球全てを打ち出す。発射と同時に鉄球は加速を帯び、地上のガジェットに全弾命中して爆砕させた。

「ハアアアッ！！」

次いでレヴァンティンの柄を握り締め、上空からガジェット1機を容易に一刀両断するシグナム。それを撃退せんと接近してきたガジェット数機も、素早く斬り伏せた。

そして、空と地上で隊長陣がガジェットに抑えている間にヘリはスバル達の降下するポイントへと向かっていた。

「準備は良いわね、みんな…？」

「もっちゃん！」

ティアナの声にもスバルが答える。それを機に、フォワード達は相棒たる自分のデバイスに視線を向ける。

「よし、頑張るぞー！！？ほらほら、キャラも一緒に…」

不意に立ち上がったのは士気を高めるべく掛け声を上げるクレオ。そして、向かい側に座っていたキャラも強制的に参加させようとする。

「えっ？あつ、ハイ！えーっと、それじゃあ…」

突然な誘いに驚きながらも真似をするように声を上げようとするキャラ。

「巻き込んでんじゃねえよ、ボケ！」

そんなクレオの背中を座ったまま蹴り飛ばすアッシュ。

「おわ、つとと…！！？」

「だつ、大丈夫ですか？クレオさん…」

「アハハッ、大丈夫大丈夫…ちよつ、危ないじゃんか!？」

蹴りの勢いでよろけ、壁に頭から衝突しかけるクレオ。心配するエリオに返事を返せば、冷や汗を掻きながらアッシュが叫ぶのだった。いつまでも能天気によつてゐるからだろうが！そんな調子じゃ、スバル達の足引つ張る羽目になるぞ…」

104部隊にいた時と違い、今回は大人数での任務。油断してミスをしては冗談では済まない。それを理解しているのかと、大きくため息を漏らすアッシュであつた。

「アハハッ！大丈夫だよアッシュ、ちゃんとあたし達でフォローするから！」

「そうか？なら、お言葉に甘えっかな。多少は…」

幾分か優しめにスバルへ返答するアッシュに不満があるようで、ムクれながらジト目で睨むクレオ。

「それにあたしは信じてゐるから！クレオのことも、アッシュのことも！」

そう言つて満面の笑みをアッシュ達に向けるスバル。

「…ッハハ、あんまプレッシャー掛けんやつて…」

「こんな時まで謙遜しない！まだ長いとは言えないけど、今日まで一緒にあの厳しい訓練やつてきた仲でしょ？少しは自信持ちなさいよね…」

溜め息混じりにアッシュの背中を軽く叩く。六課に来て数日、今日まで共に訓練を頑張つてきた仲間が足手纏いになるハズがない。少し素っ気ないながらも、2人に喝を入れるように言葉を述べるティアナであつた。

「そうそう、ティアナの言うとおり！にしてもそんな風に激励してくれるなんて、何だかんだでやっぱ氣遣つてくれてんだねえ…」

背中を一押しするようなティアナの一言に、ニヤリと笑むクレオ。

「うっ、うっさい！あたしだってそのくらいするわよ…」

その横槍に少し頬を赤く染め、ティアナはプイッとそっぽを向いて

しまう。

「オイ！着いたぞ、降下ポイント上空だ！」

操縦席のヴァイスの声がヘリ内に響く。ティアナの返事を合図に立ち上がるスターズフォワード。

「了解です、行くわよアンタ達！」

「オッケー！」

3人はマツハキャリバー、クロスミラージュ、グリッターエッジを再度しっかりと握り締めてハッチへと向かう。

「気を付けて下さいね、みなさん！」

「うん！じゃあ、下で合流しようね？」

エリオの声にスバルが笑顔で返事を返し、3人はハッチの前に到着。それが完全に開けば、その前に立ち並んだ。

「スターズ03、スバル・ナカジマ！」

「スターズ04、ティアナ・ランスター！」

「へへっ！これ言いたかったんだよね……スターズ05、クレオ・ハイゼット！」

「……行きますッ！！……」

コールサインと共に、順にハッチから降下を開始。そして空中でバリアジャケットを纏い、地上へと降りていく。

「よし……次、ライトニング！行つて来い！」

「……ハイッ！！……」

数秒後、ヴァイスの激励の込められた声に返事をするエリオ達。

「行きましょう、アッシュさん！」

「ああ、行くか！」

お互いに頷き合えば、座席から立ち上がってハッチの前に到着するエリオ達。

「ライトニング03、エリオ・モンディアル……！」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「ライトニング05、アッシュ・スタリオン……！」

「……行きますッ！！……」

エリオを筆頭にキャロとフリード、アッシュと順にハッチから飛び立つ。スバル達と同様、空中でバリアジャケットを纏い地上へと降下していくのだった。

管理外世界・某所

場所は変わってトイフェルのアジト。そこにはアレグロ・レヴィン達から電子モニターを椅子に腰掛け眺める団長の姿があった。

「あーら、噂通り対応の早い組織なのね。機動六課って…」

「そこが部隊の売りの一つでもあるそうですから…」

その後ろからポツリと言葉を漏らしながら近付くエテルナ。

「もー、エテルナってば…またそれ被ってるの？此処にいる時ぐらい外しとけば良いのに…」

部下の姿に残念そうな声を出す団長。理由は、エテルナの口元が露出した鉄仮面が原因だった。

「これは団長^{ボス}から頂いた物ですから、肌身離さず身に付けておきたいのです。」

「そう？まあ良いわ、どっちにしろアンタはそれがなきゃ…存在自体“成立”しないものね。おっと、話が反れちゃったわね…」

意味深な言葉を漏らした後、再度画面に目をやる2人。

「フフフツ、どの程度の実力持ちなのか見せてもらおうじゃないの…」

1人そう呟くと不適に笑みを浮かべながら頬杖を付く団長^{ボス}。その笑みの意味は余裕から来るものなのか、それとも…。

ピアジオ地方・森林地帯

《ティアナ、こちらアッシュ…全員配置に付いたぜ？》

《オツケー…じゃあ、そっちは頼むわよ？》

場所はスターズメンバーが担当する防衛区域。地上を二手に分かれて侵攻するガジェットを迎撃すべく、スバル達も二手に分かれて配置に付いて迎撃準備に入っていた。

《ヴィータ副隊長、フォワードメンバー…全員配置に付きました！》
通信の相手は一足先に地上のガジェットに攻撃を仕掛けにいったヴィータであった。

《よし…手筈通り、あたしはこのままダムの防衛に向かう！そっちは任すぞ？》

《了解ッ！》

通信を切れば、1つの推測を立てるティアナ。映像でガジェット達の動きを見た限り、性能はスカリエッティの所持していた物より良くなっている。今まで相手をしていた機体と同じ物と思って対処してはいけない、そう考えるのだった。

「2人とも、団体さん…そろそろこっちに来るよ？」

ガジェット達を木の枝の上から確認、列を乱さずに自分たちの下へ接近してきていることをクレオが2人に伝えた。

「というかクレオ、いつの間にそんなところに？」

「様子見るなら高いところに限るでしょ！アッシュと2人でやる時は、結構よくやってたし…」

枝から飛び降りて天を指差すクレオ。

「まるで猿ね…まあ、スケベ猿とはアッシュから聞いてるし…仕方ないわね？」

「誰がスケベ猿だよッ！？」

地団駄を踏みながらクレオが怒る。

「ティア、クレオ！」

スバルの声に身構える2人。前方の茂みが揺れ、ガジェット達が飛び出してきた。

「やるわよ、2人ともし」

「もちッ!!」

クロスミラー・ジュを構えながら問うティアナへ陽気に返答。クレオも、右手に握ったグリッターエッジをサツと構える。

「行くぞおおおおっ!!」

腹の底から声を上げて、マツハキヤリバーで急加速。一筋の矢と化しながら、ガジェット達へと突っ込んでいく。

「あつちは始まったみたいだな…」

同じくこちらはエリオ達ライトニングメンバーが担当する防衛区域。スバル達のいる防衛区域から響く爆音に、迎撃を始めたのを悟り前を見据えるアツシュ。

「…しっかし、1番新米の俺が1番前に出て迎撃か。プレッシャーかかるなあ…」

六課に来てからの初任務。口では緊張していると述べるも、気持ちには萎縮してはいない。不安になっていいる暇はないと理解しているからだ。今は任務に集中するのが優先、そのためにも自分に出来ることを懸命にやる。そう自分にそう心に言い聞かせるアツシュ。

「大丈夫ですよ!それに1人じゃなくて、みんなで頑張つてこそチームなんですから…一致団結していきましょう!」

「エリオ君の言うとおりですよ。それにさっきティアナさんも言つてたじゃないですか…自信持つてつて!」

「ハハッ、六課じゃ先輩とはいえ…年下に励まされてるようじゃ、俺もまだまだだな…ありがとよ!」

エリオとキャロの励ましの言葉に目の前で腰を低く落とし、ニツと笑みを向けて2人の肩をポンと叩くアツシュ。

「えへへ、後方支援は任せてくださいね?」

「キュクルー!」

両拳を胸の前でグツと握り、エリオに便乗するように述べるキャロ。そして「自分も頑張る」と言いたげにフリードが鳴く。

「頼むぜ？さて、俺達もそろそろ行くとするか…」

「ハイツ！」

ふと耳を澄ませば、ガジェットが徐々に近付いている機械音に気付くアッシュ。そして、こちらと遭遇する前に奇襲を掛けるべく、茂みの中に飛び込みガジェット達へと向かって行った。

機動六課隊舎・管制室

同時刻、現場の様子をモニターで確認するはやてとロングアークスタッフの面々。

「スターズ、ライトニング！共に配置に付き迎撃を開始しました！」

「現地部隊からの報告、人民の避難誘導完了とのことです！」

アルト・ルキノからの報告が次々と室内に響く。そしてはやては、報告を耳にしながらモニターを静かに見続けていた。

（頼むで、みんな！）

現場でガジェットと相對するなのは達の身を心の中で案じ、部下達に指示を与え始めるはやて。

トイフェルとの最初の激突、この衝突がどれだけ事件解決に発展するだろうか。

T o b e c o n t i n u e . . .

E p i c ・ 9 『開戦（前編）』（後書き）

* T w i t t R o o m *

（作者）

今回は戦闘部分が長くなりそうなので、初の前後編に分けました。
ほんのちよつと戦闘描写も入り、ますますこれから先の作業が難解
になりそうで恐ろしいったらない。こういうのがアニメ化した場合、
色々台詞カットとかあるんだろうな。特に最後ら辺とか…そんな訳
でE p i c ・ 9 前編でした！。

〱オリキャラ説明所(クレオ・ハイゼット)〱(前書き)

先の3話終盤で登場したオリキャラ達の詳細を記載しておきます。
とりあえず外見や性格などを記載しておきましょう、詳しいことは
ストーリーが進んでから此処に“編集”という形で加えていきます。

〱オリキャラ説明所（クレオ・ハイゼット）〱

クレオ・ハイゼット「Cureo・Hijet」

（CV：鈴村健一）

所属：時空管理局 陸上警備部 陸士104部隊

役職／階級：陸戦魔導師／三等陸士

出身：ミッドチルダ東部

魔法術式／魔導師ランク：ミッドチルダ式／陸戦Bランク

所持資格：災害担当部隊／バイク免許

子供染みた性格で表情豊かなポジティブ思考のお調子者。16歳、魔力色は「緑色」。髪型は外跳ねで浅葱色あさぎいろをしており、少々長めな後ろ髪をゴムで一つに結わえている。本人曰く、自分の気持ちに素直で可愛い女の子に興味津々。ナンパまでとは行かないが、知り合った娘には積極的に交友を深めようとするバイタリテイの強い少年（余談：彼女が出来た時は自重するらしい）。

「堪らない」が口癖で、気持ちを表現する際には多用する。幼馴染兼パートナーのアッシュとは10年来の付き合いである。上官相手でも陽気な態度を崩さず、アッシュには「弁えろ」と怒鳴られるが微塵も気にしておらず、逆にアッシュには「堅すぎる」と指摘し返している。

アッシュと共に第一陸士訓練校へ入学。カリキュラム終了後、陸士104部隊へ入隊した。元々魔導師を目指していたらしく資質も魔力もアッシュより上である。勤務態度には問題はないがデスクワーク（書類仕事）が苦手でいつも後回しにしがち。そのため、提出期限はギリギリになることが多々あり、一度他のことに気が向くと仕事がお座成りになり易い。

名前の由来は、ダイハツ工業の軽自動車である「クオーレ」と「ハイゼット」。

CV：鈴村健一の出演作品。

銀魂（沖田総悟）、仮面ライダー電王（リュウタロス）／ R 良太郎
／ 仮面ライダー電王ガンフォームの声）、うたのプリンスさまっ♪ マジLOVE1000%（聖川真斗）、機動戦士ガンダムSEED DESTINY（シン・アスカ） e t c . . .

くオリキャラ説明所(クレオ・ハイゼット)く(後書き)

声のイメージ・性格などは『仮面ライダー電王』に登場するイメージン(怪人)、リュウタロスをモデルにしています。しかし声質はリュウタより少し上な“少年”でイメージして下さい。えっ、無理?じゃあ好きなイメージでどうぞ(?)。チャラ男みたいな感じに見えますが『お茶行かない?』とかいうナンパなノリではなく『一緒に遊ぼうよ』と子供が同じ年の子に声掛けるノリで声かける子です。んっ、結局似たようなモン?指摘したら駄目です、以上。

〵オリキャラ説明所(クレオ・ハイゼット)〴〵(前書き)

愛用デバイス、使用魔法などの詳細を記載する場所です。それ以上でもそれ以下でもない(！？)

「オリキャラ説明所（クレオ・ハイゼット）」

《デバイス》

グリッターエッジ（G l i t t e r E d g e）

クレオの愛用するボウガン型のインテリジェントデバイス。内部にリボルバー式カートリッジシステムを搭載しており、カートリッジ最大装弾数は6発。クレオが開発側に「射撃特化のデバイスが良い」と要望し、完成したのがこのグリッターエッジである。後部トリガー付近にカートリッジ装填口があり、使用後はグリップ下部からカートリッジを排莢する。連射性能が高く、両翼部に小さな発射口が付いており一度に三発の同時発射が可能。ガーの真上の中心部に丸い宝石がある。

待機モード

小型な十字架の形状をしており、いつも首から引っ掛けている。

クロスボウモード（C r o s s b o w m o d e）

グリッターエッジの基本モード。形状はボウガン型で発射速度・命中精度と、射撃に必要な性能を特化した形態。後部のトリガーを引くと、短時間だけ魔力弾の威力・弾速を高める機能を備えており、使用した際の射撃速度は通常時の2倍速い。撃ち出される魔力弾の形状は、基本的に矢の形状をしている。軽量化が施されており、片手で構えての射撃も可能。

・アローバレット（A r r o w B a r r e t）

圧縮魔力を矢の弾丸状に形成し、加速して打ち出す直射型射撃魔法。グリッターエッジの基本となる射撃魔法であり、他の射撃魔法はこ

の魔法の応用したものである。威力は無いが弾速能力は高く、主に標的を牽制したりする時に多用する。

・デифフューション・バレット（Diffusion Barrel
t）

援護射撃の際によく使用する誘導制御型射撃魔法。銃口の先端に魔力を集積した球状の魔力弾を形成。自身の意思で魔力球を爆発させ、無数のレーザー状の魔力弾を地上目掛けて拡散させる誘導操作弾。空間制圧を行う際に使用する他に、遠距離からの足止めによく使用される。上空へと誘導された魔力弾は、他者に破壊されるか自分の意思で爆破させない限りは一定位置で留まり続ける。ちなみに、他者に破壊された場合は拡散しない。

くオリキャラ説明所（クレオ・ハイゼット）く（後書き）

全距離での射撃魔法を得意とし、補助魔法も組み合わせ素早い連続射撃で味方をサポートする『ガードウイング』寄りのガンナーです。状況に応じて近距離戦闘も行いますが、その場合は素早い移動と射撃で相手を攪乱・翻弄する。ちなみに使用する魔法には威力に欠けるものが多く、若火力に欠けるのが現在の難点となっています。自分ではあまり仕留めず、味方のフォローを請け負うのがクレオの役目です。

〱オリキャラ説明所(アッシュ・スタリオン)〱(前書き)

先の3話終盤で登場したオリキャラ達の詳細を記載しておきます。
とりあえず外見や性格などを記載しておきましょう、詳しいことは
ストーリーが進んでから此処に“編集”という形で加えていきます。

（オリキャラ説明所（アッシュ・スタリオン））

アッシュ・スタリオン「Ash - Starion」

（CV：森田成一）

所属：時空管理局 陸上警備部 陸士104部隊

役職／階級：陸戦魔導師騎士／三等陸士

出身：ミッドチルダ東部

魔法術式／魔導師ランク：近代ベルカ式／陸戦Bランク

所持資格：災害担当部隊／バイク免許

紫紺色で逆立ったツンツンヘアと左腕の義腕が特徴な少年。16歳、魔力色は「紫色」。少々堅物気味だが、実直且つ直向きな性格をした努力家。幼馴染でありパートナーのクレオとは親友というより兄弟のような仲であり、常時陽気なクレオの管理局員らしからぬ態度に気疲れする日々を送りながら業務に励んでいる。

パツと見はしつかり者だが典型的な初心で、異性からスキンシップ（手を握るなど）の耐性は脆い。また照れを指摘されると不貞腐れたり、狼狽えながら全力否定する。その他、クレオの余計な発言や文句に対してはプロレスめいた絞め技や鉄拳制裁などを瞬時に浴びせたり、意外と短気でクレオ以上に子供っぽい一面を持っている。

7年前に災害事故に巻き込まれ、その際に左腕を落下してきた瓦礫により潰されてからは義腕で過ごしてきた。ちなみに人工皮膚は施しておらず、常に機械の腕状態。この事件から数年後、第一陸士訓練校へ入学。クレオと違って魔力値はそれほど高くない戦闘なども苦手だったが、“ある決意”から努力を重ねてカリキュラムを終了して陸士104部隊へ入隊した。

名前の由来は、三菱自動車工業で生産していたFR式自動車「スタ

リオン」。

CV：森田成一の出演作品。

BLEACH（黒崎一護・白一護）、戦国BASARAシリーズ（
前田慶次）、機動戦士ガンダムSEED DESTINY（アウル・
ニード）、TIGER & amp; BUNNY（バーナビー・ブ
ルックスJr.） etc...

くオリキャラ説明所（アッシュ・スタリオン）く（後書き）

性格・口調等は『BLEACH』の主役、黒崎一護をと『戦国BASARA』の前田慶次を足した感じですかね。クレオよりはシンブルな設定になってはいます。クレオとのやり取りでは喧嘩っ早そうな感じでしたが基本的温厚な兄貴肌チックな少年ですが、兄貴ぶるのには“理由”があります。それはまた物語が進んでから説明します。

〱オリキャラ説明所(アッシュ・スタリオン)〲〴〵(前書き)

愛用デバイス、使用魔法などの詳細を記載する場所です。それ以上でもそれ以下でもない(！？)

くオリキャラ説明所（アッシュ・スタリオン）く

《デバイス》

ソルダート（Soldat）

アッシュの両腕、両脚に装着される近代ベルカ式のアームドデバイス。戦闘時は、箆手と具足の二つに分かれる珍しいタイプのデバイス。魔力強化・耐久性を特化したデバイスで箆手、具足の装弾数はそれぞれに付き最大5発（計10発）。両手足に装着するため重量感があるように見えるが、実はかなり軽量。エリオのストラーダやシグナムのレヴァンティンと似たタイプのカートリッジシステムが搭載されている。色合いは銀、黒、菖蒲色（しやうぶいろ）の三種で、右手の甲の中心に六角形で紫の宝石が埋め込まれている。AIの性格はアッシュ同様に生真面目な性格。また、エリオのストラーダと同様にマスターの感情に同調する傾向がある。

日本語訳：兵士

待機フォルム

六角形で、中心に宝石が埋め込まれたキーホルダー状で、ズボンの腰に引っ掛けてある。

ファウストフォルム（Faust form）

ソルダート（箆手）の基本フォルム。

魔力付与攻撃が特に優れている形態で、手から肘までを覆われて、肘を覆う防具はどの部分よりも硬い装甲を誇っていて、攻撃の際にも多用される。魔力付与を受けた際、耐久性を上昇させる能力を持つ。カートリッジロード時には、左箆手の前腕部分にあるダクトパイプをスライドさせて、ロードと同時に排莢を行っている。

バインフォルム（Bein form）

ソルダート（具足）の基本フォルム。箆手同様に魔力付与を受けた際、耐久性を上昇させる能力を持つ。足から膝までが具足で覆われていて、膝の防具は、肘の防具同様に特別な装甲を誇り、攻撃の際に多用される。跳躍力を高める特殊兵装が内部に搭載されており、魔力付与がなくても高層ビルの上3・4階ほどの高さまでなら軽く跳び上がる。右足の端部からカートリッジを装填、ロード時の際は具足の脛脰部分にあるダクトパーツをスライドさせて、ロードと同時に排莢を行う。

・グリューエン・シュラク（Gluehen Schlag）

ソルダート（箆手）の拳、肘の二箇所どちらかに魔力を圧縮。同時に箆手が発光し、纏った魔力が炎のように燃え上がる。発動すると同時に肩・腕を強化して両腕の動作速度が上昇、圧縮した魔力を拳で素早く重い一撃を標的に叩き付けて攻撃する。また、魔力反射の効果を附与されており、小型の魔力弾なら弾き飛ばすことも可能である。他の魔法と同時に発動が可能であり強化持続時間が長く、他の魔法使用時も効力を継続出来るが魔力消費が増すため、アッシュは主に後述の『グリューエン・トリット』と同時使用が多い（理由：どちらも魔力消費が少ないため）。

日本語訳：灼熱の一撃

・グリューエン・トリット（Gluehen Tritt）

ソルダート（具足）の足、膝の二箇所どちらかに魔力を圧縮。同時に具足が発光し、纏った魔力が炎のように燃え上がる。発動すると同時に膝・足を強化して両足の動作速度が上昇、圧縮した魔力を膝蹴り、回し蹴りなどを駆使して標的に強烈な蹴り技を炸裂させる打撃魔法。また、魔力反射の効果を附与されていて、小型の魔力弾なら弾き飛ばすことも出来る。グリューエン・シュラクと同時に発動

が可能であり強化持続時間が長く、他の魔法使用時も効力を継続出来るが魔力消費が増す。

日本語訳：灼熱の蹴撃

・ヴィルベル・シュラーク(Wirbel Schlag)

拳から腕に渦状に纏って放つ中威力打撃魔法。所謂「コークスクリユー・ブロー」であり、纏った魔力を回転させると同時に、手首を同じ方向へ捻らせることで威力を高める。渦巻いた魔力はドリルのように防御壁などを削り取るように貫き破砕する効果を持ち、命中と同時に回転速度が急速に増す。

日本語訳：渦巻く一撃

くオリキャラ説明所（アッシュ・スタリオン）２（後書き）

拳を軸に肘・膝の打撃を多様する我流体術、所謂『キックボクシング』が戦闘スタイルです。パワーで押し切る分、機動面での能力は低いですが持ち前の反射神経・直感力で機動面を補っている。突攻型のスバルと対照的に、接近してきた相手の懐に入り込んで近距離からの痛烈な打撃で標的を粉碎するカウンターを得意しています。

〱オリキャラ説明所（敵組織・トイフェル）〱（前書き）

近作で登場する敵組織“トイフェル”の詳細を此処に一気に記載します。

一纏めの方が変にスペース取らなくて良いですから“クレッシュ（クレオとアッシュ）”みたく長い詳細でやると、幅取るので…手抜きじゃないです（！？）。

くオリキャラ説明所（敵組織・トイフェル）く

・団長（CV：平松昌子）

Epic・1の終盤に登場した、某管理外世界で過ごす人物。口調から女性であること以外、容姿などの詳細は一切明らかになっていない。口調は優しく飄々としており、感情が高揚すると狂喜染みた笑い声を上げる。後述のアレグロの行動や『団長^{ボス}』と呼ばれることから、彼女が“トイフェル”と名乗る組織のリーダーであることが判明している。

CV：平松昌子の出演作品。

ケロロ軍曹（日向秋・ギロロ伍長（幼年期）・ちびギロロ他）、とある魔術の禁書目録IE（前方のヴェント）、スラムダンク（赤木晴子）、逮捕しちゃうぞシリーズ（小早川美幸）etc．．

・アレグロ・オースチン（CV：鈴木達央）

元地上本部所属で男性。優秀な査察官として活躍し、摘発した組織の数も多く将来を嘱望されていたエリート。しかしその本性は、出世や自己利益の為なら裏で犯罪者との内通も厭わない利己主義者。後に自分の汚職を摘発した同期の査察官を殺害、逃走して12年もの間行方知れずになっていた。口調は紳士的で“レディーファースト”を気取っており、敵に挑発めいた証拠を残すなど少々ナルシィ。そのせいか、組織の女性陣からの扱いは決して良くない模様。Epic・1終盤では、無線での連絡時のみ登場。

名前の由来はイギリスの自動車メーカー『ブリティッシュ・レイランド』により、1973年～1983年にかけて生産された小型乗

用車の『オースチン・アレグロ』。

CV：鈴木達央の出演作品。

バカとテストと召喚獣シリーズ（坂本雄二）、黒執事II（ドルイ
アレリスト・チェンバーツト子爵）、とある魔術の禁書目録（天井亜雄）、DEAR BO
YS（石井努）etc．．

・エテルナ（CV：小清水亜美）

Ep ic．3に初登場した組織のメンバーの女性。淡々とした機械的な口調で語り、口元の露出した頭を覆う形状の仮面を付けている。初登場時は生態ポッドの中に身を置き、団長とは念話で会話していた。Ep ic．8ではポッドから出て、アレグロ達に通信を送っていた。感情の起伏を見せないが団長に対する忠誠心は高い模様。口数が少なく寡黙だが、嫌悪感を抱く相手には容赦なく罵声を浴びせる。実際、レディーファースト気取りのアレグロには極端に無愛想な態度を取っていた。

名前の由来は、三菱自動車工業が製造していた乗用車『エテルナ』から。イタリア語で「永遠」という意味。

CV：小清水亜美の出演作品。

コードギアス 反逆のルルーシュ』シリーズ（紅月カレン）、『狼と香辛料』シリーズ（ホロ）、スイートプリキュア♪（北条響ノキュアメロディ）、とある魔術の禁書目録（麦野沈利）etc．．

・レヴィン（CV：伊藤美紀）

Ep ic．8にて初登場。組織のメンバーで何かの任務の為、アレグロと共に変装して行動していた20代後半の女性。

名前の由来は、トヨタ自動車が生産していた自動車でカローラをベースとした1,600ccクラスの小型スポーツクーペである『カローラ“レビン”』から。

CV：伊藤美紀の出演作品。

ドラゴンボールZ（人造人間18号）、Fate/stay night（藤村大河）、テイルズ・オブ・ジアビス（魔弾のリグレット）、銀魂（孔雀姫華陀）etc..

〱オリキャラ説明所（敵組織・トイフェル）〱（後書き）

名前などが明かされたら此处を更新しておきます、以上！

10 / 30

ある程度敵もキャラ設定とか固まってきたので“CV:”とか付けてみました。

作品のチョイスは背後の趣味、はたまたチラッと声聞いたなど極端です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188x/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ Another epic. ~

2011年11月4日03時16分発行